終焉を司る者

スノーマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終焉を司る者

【Ｎコード】
Ｎ２４９８Ｕ

【作者名】
スノーマン

【あらすじ】
『ごめん、死んでくれ。兄さん。』

弟に殺され、世界に拒絶された男が異世界で大切な物を守る為に世界に喧嘩を売るお話。

主人公最強ぎみです。

出会い

「ここはどこだ？」
俺、雹也（ヒョウヤ）は何故自分がこんな森の中で倒れているのか思い出せずにいた。

「たしか、白夜（ビャクヤ）とマゼリナに呼ばれたんだったよな…
で、白夜が泣きそうな顔をしてて…」

『ごめん、死んでくれ。兄さん。』

瞬間、俺は何があったのか思い出した。
泣きそうな顔の白夜とマゼリナを見て全てを悟った俺は…

「死んだのか。」

いや、死んでいたらここには居ない筈である。

「そういや、死ねないんだったな、俺。
って事は戻ったのか。」

俺はとある事情で死ねない体なのだ。
しかし、今回は体が全消した為、戻るのに数年はかかった筈だ。

「で、ここは日本か？それとも「あっち」か？」

確認しようにも、周りには木しかなく、確認のしようが無かった。

「周りは木だけ…、いや何かが近付いてきてるな。」

大きな殺気がこちらに近づいていた。
が、雹也は殆ど回復できておらず、能力はおろか体を動かす事もままならない。

「それでも立たなきゃ死ぬよな～。」

何かを諦めたように雹也が立つのと同時に現れたのは体長五メートルほどもある白い化け猪だった。

「あっち側の世界なわけね。」

日本にこんな馬鹿でかい猪はいない。という事はここはあちら側の

世界なのだろう。

「「£％＃＆¢$」」

人外の言葉を叫び突進してくる化け猪。
それを避け、渾身の力で化け猪の頭に蹴りを叩きつける。
しかし、弱り切っている雹也の蹴りは化け猪の命を削り切ることができなかった。
「$¢＆＃％！！」

奇声を発してよろける化け猪を横目に雹也は高く跳躍し、能力を強制発動した。

「に…ひゃく……ばい」

戻ってそうそうの無茶な肉体酷使、能力の強制発動によって雹也は限界だった。
薄れゆく意識の中、二百倍になった自らの足を化け猪の頭に振り落とした。

†††††††††††††††††††††

俺と白夜は同い年の兄弟で六歳までは施設で育った。
そこには俺たちの他にもたくさんの子供がいて、何一つ不自由なく、大切に育てられた。

しかし、それは殆どの者にとって最後の幸せであり、施設の人にとっては彼らへの罪滅ぼしだった。

俺達が六歳になった年の冬世界中から集められた三万人の子供は二人を除いて跡形もなく消え去った。

†††††††††††††††

俺は暗闇の中を漂っていた。
「また死んだのか？」
いや、そうでも無いらしい。段々と体の感覚を取り戻していくと同時に周囲の情報が入ってくる。
どうやら俺はベッドに横になっているようだ。
体も足を除いて殆回復している。

「やっぱり、病み上がりには厳しかったな。」

案の定、化け猪を蹴り飛ばした足は骨から筋肉、筋に至るまで目も当てられない状況だった。

「一度、分解しなきゃ駄目だな。」

足の分子間の引力を解除し、元通りに再構成する。
しっかりと動く事を確認したら、次は何故ベッドで寝ていたのか考える。

「十中八九、誰かに助けられたんだな。」

既にこの小屋の構造を能力を使い把握していた雹也は物の配置などから自分を助けてくれたのは一人の女性だと見当をつけていた。
しかし、今はここにはいないらしい。

「腹も減ったし、朝飯でも作って待ってるか。
御礼もしなきゃだしな。」

雹也は朝ご飯を作り出した。

出会い？

「王、また姫君が脱走されましたぞ！！」

「またか…、神楽にも困ったものだな。」

この国、「円」の玉座に座る王は毎度の娘の脱走に頭を抱えていた。

「いかがなさいましょう。」

「なら聞こう、この国で神楽を止められるものがいると思うか？」

そうなのだ、神楽は生まれた時から極端に霊力が強くその上、体術にも優れている為、もはや円では、彼女の師匠であり、武官長のカリスくらいしか相手にならないのであった。

しかし、カリスは彼女に甘い為、戦力外なのだ。

「カリス殿は…無理ですね。」

「まぁ、良い。おそらく、またカリスの下に転がりこんでおるのだろう。

いつも通り、監視をつけて報告させろ。」

「御意。」

「はぁ、儂もカリスのことは言えんかのう…」

何だかんだ言って、王も娘には甘かった。

「はぁ！！」

「ぶはっ」

彼女、神楽の前には屍の山があった。

「神楽様、もう少し手加減して差し上げてはどうでしょう？」

神楽に話かけたのは耳の長い老人で、円では珍しいエルフである。
もう齢、三百を超えており、裏から円を支えてきた人物でもある。

「カリスか。
これでも手加減している。しかし、将来はこの国を守る者なのだから、甘やかす訳にもいかないだろ？
それに最近は”人間”の動きも活発化しているしな。」

「いやはや、お厳しいですな。」

そういい、カリスは苦笑した。

「神楽、また王朝から抜け出して来たのかい？」

「おやおや、新入りを殺さないでくださいよ。」
稽古場に入ってきたのは神楽の兄弟子達で、今では高位の武官達である。
「はぁ、女だと思って油断してたんだろうな…、可哀想に。」
「いや、例え油断してなくとも神楽には勝てないだろ。」
「失礼な奴らだな。」
彼らは彼女と古くからの付き合いであり、身分を考えずに話せる数少ない友人である。
「そういや神楽、また貴族に求婚されたんだって？」
この国の王族の女性は特別であり、ある役目を担う代わりに結婚は気に入った者とする事ができる。
「ああ、すっぱりお断りしたけどな。」
「神楽は美人だし気立てもいいから男がほっとかないだろうよ。」
事実、神楽はこれまで多くの人達に求婚されてきたが、全て断ってきた。
しかし、その数は止まることを知らず、この道場内でも神楽に密かに思いを寄せている者が数多くいた。
「私はまだ十六歳だぞ？
結婚なんぞしてたまるか。それに、今まで求婚してきた男は私の好

みではなかったしな。」

「じゃぁ、神楽の好みの男性ってどんなのだよ？」

「私を守ってくれる男だな。」

「いや～、無理じゃないか？」

「分からないだろ！！

私だって女だからな、守ってくれるような男に憧れるんだよ。」

顔を赤くして照れる神楽の破壊力は凄まじく、ここにいる全ての男を魅了した。

「じゃあ、私は聖森の湖で体を清めてくるから。」

照れ隠しをするように神楽は急いで道場を後にした。

「森が怯えている？」

聖森を目の前に神楽は違和感を感じていた。

この森は聖なる湖があるため、魔物は近付けない筈である。勿論、

湖の影響のない森の深部には強力な魔物が存在するが、湖で水浴びをする予定の私には関係ない。

「山賊でもいるのか？」

例えそうだとしても山賊ごときが何十人束になって現れようが、神楽の霊術の前では紙屑同然である。
よって問題ないと判断した神楽は聖森に足を踏み入れた。

「やっぱり、おかしいな。」
湖に続くいつもの道を歩いていると段々と違和感が濃くなっていくのを感じた。
「（いや、これは気配？
しかし、もしこれが気配なのだとしたら、よっぽど強力な魔物でしか…）」

「「£％＃＆¢＄」」

神楽の推測を肯定するかのように、遠くから魔物の雄叫びが聞こえ

た。

「（馬鹿な！？
ここは湖のすぐ近くだぞ？こんな場所に魔物が現れる筈がない！！）
」

そう思いながらも神楽は魔物の声がした方へ駆けていく。

「＄￠＆＃％！！」

またしても魔物の声が聞こえたが、その距離はそう遠くではない。

次の瞬間、大地が揺れた。

揺れが収まると同時にさっきまであんなに濃かった魔物の気配が消えているのが分かる。
何があったのかと、魔物の気配があった方へ向かうと一人の男と巨大な猪、”白猪”が倒れていた。
更に、”白猪”を中心に巨大なクレーターが生じている。

「この男が殺ったのか？」

白猪は森の最深部に潜む強力な魔物だ。
人里にはめったに現れず、ましてや聖森でなど絶対に見かけない。

一度、現れようものなら、国軍を出すようなレベルの化け物だ。
私でも、負けはしないが、苦戦を強いられるだろう難敵である。
それを私と同じくらいの年齢であろう男が一人で倒したのだから驚愕に値する。

少しの間、呆然としていたが、すぐに我に帰り、全く動かない男の方へ駆け寄った。

男の顔を見るなりまた違った意味で驚愕した。
そこには黒髪の美青年が横たわっていた。
見たこともないような美形の顔に気圧されつつも、体を起こし、怪我がないか確かめる。

上半身は何の異常もない。そして下半身へと目を向け足に触れた瞬間、その違和感に気がついた。

「右足が…」

もはや骨折などという生易しい状態ではなく、見た目は足だがもう、歩くことは出来ないだろう。

「可哀想に今、医者に連れて行くからな。」

神楽は回復霊術を使えない自分を歯がゆく思った。

そして男を持ち上げた瞬間今更ながらにこの男が天界人でない事に気がついた。

「お前、人間か？」

これはまずいことになった。
普段なら何の問題もないが今、円を含む天界は人間に戦争を仕掛けられているのだ。
しかも見つかった場所が聖森となれば処刑は免れないだろう。

そこまで考えた神楽は王朝にこの男を運ぶのを諦め、湖のほとりの小屋に運びこんだ。

小屋につき、ベッドに男を寝かせ、布団をかけ、額に濡れた布をあてがった。

彼が心配ではあったがこれ以上長居すると聖森に入れず待機しているであろう私の見張りに怪しまれるので白猪の死体を処分してから帰る事にした。

「……死体がない。」

おかしい、クレーターは残っているのだからここに白猪の死体があったのは間違いない。しかし今、白猪の死体があった場所には何もなかった。

薄気味悪いものを感じながらも神楽は聖森を後にした。

†††††††††††††††

翌日、昨日の彼が心配だった神楽は朝食も食べずに急いで小屋に戻り扉を開けた。

「あはよう。朝ご飯もう少しでできるから座って待っててて。」

そこには昨日の美青年が朝ご飯を作る姿があった。

「あ、あぁ分かった。」

思わず男の声に従い、椅子に座ってしまうと、いよいよ頭が混乱し

てきた。

「（おかしい、彼は大怪我をしている筈であんな風に朝食を用意できる訳がない。
そもそもなんで昨日の足で歩けているんだ？）」

「お待たせ。ご飯と焼き魚しかできなかったけど、どうぞ召し上がれ。」

混乱する頭でひたすら考え、知恵熱で茹で上がりそうになる神楽の前に美味しそうな朝食が用意された。

「い、頂きます。」
恐る恐る、焼き魚を口にする。
すると、焼き加減といい、塩加減といい、文句なしの美味しさだった。

「うまい！！」

「それは良かった。
おかわりもあるからゆっくり食べてね。」

あまりの美味しさに夢中で食べてしまった。

「御馳走様でした。」

「お粗末さまでした。
はい、お茶をどうぞ。」

「ありがとう。」

「「ズズー」」

「「ほっ」」

楽しい反応

さてと、思わず朝食を共にし、お茶で和んでしまった。
よく見ると、目の前の女性は黒髪の長髪でかなりの美人だ。
この人が俺を助けてくれたんだから、御礼しなきゃなんだけど、テンパっている彼女が面白くて、可愛いから、彼女から動くまではしばらくそれを楽しんでいた。

「って和んでる場合ではない！！」

おっ、やっと状況が掴めたらしい彼女は勢い良く立ち上がり叫んだ。

「俺の名前は氷夜。
助けてくれてありがとう。」

「あ、あぁ。
私の名前は月詠　神楽だ。」

なる程、神楽という名前といい、格好といい、どうやらここの様式は古い日本に近いようだな。
あと気になるのは”月詠”という名前の神が日本にもいて、この世界には神様が普通に存在するから何か関係があるかもしれないということか。

「お茶のお代わり飲む？」

「あぁ、頼む。」

「はい、どうぞ。」

「ありがとう。」

「神楽って神様なの？」

「ブーー！！」

神様はお茶を思いっきり吹き出した。

「な、なぜ、そんな事を聞く？」

「いや、”月詠”って神様の名前だろ？」

俺は神楽の反応が面白くて笑いを堪えながら答えた。いや、若干堪えきれずに笑っていた。

「何故、貴様がそんな事を知っている？」

いきなり神楽の雰囲気が変わった。

しかし、俺にはそんな事よりも重要な事があった。

「氷夜。」

「は？」

「貴様じゃなくて、氷夜だから。」

少し拗ねて言ってみる。
すると神楽は顔を赤くしてしまった。
やっぱり可愛いな。

この時、神楽は氷夜の拗ねた顔に先程までのクールな感じとのギャップで思わず顔を赤めてしまったのだがもちろん、氷夜は知っててやっている。

「あぁ、もう分かった、氷夜。
これでいいか？」

「あぁ神楽。」

氷夜が嬉しそうに答えるのを見ていると神楽は完全に毒気が抜けてしまった。

「はぁ、氷夜と話していると調子が狂うな。
話を戻すが、何で”月詠”のことを知っているんだ？」

先程と同じ質問だが多少緊張感はあっても先程のような威圧感はなかった。

「俺の世界では一般的だよ。」

”月詠”と言ったら日本では有名な神様だったしな。
確か夜を司る神様だったか？

「きみ…氷夜の世界？」

きみと言おうとした神楽を睨むとすぐに言い直してくれた。
やっぱり楽しいな神様は。

「あぁ、異世界から来た。と言って信じてくれるか？」

突拍子もない話だから信じてもらえるとも思えないが。

「氷夜は異世界人か！？」

意外にすんなり受け入れられたな。

「俺の他にもいるのか、異世界？」

「いる。ここ数年の間に現れて、天界に戦争を仕掛けてきている。」

いや～、俺らがいなくなって異世界交流が盛んになってるね～。

「天界？」

「そうか、氷夜が異世界人だから分からないか？」

「そうだね、言葉以外は何も知らないと思ってくれて構わない。」

大ざっぱに魔法のある世界というくらいしか俺はこの世界を知らない。

「じゃあ、少し説明すると、世界は、魔界、人間界、そしてここ天界の三つに別れていて、それぞれに魔力を持つ魔人、能力を持つ人間、霊力を持つ天界人が住んでいる訳。」

「魔力、能力、霊力の違いは何？」

「それぞれ魔力を使って魔法、霊力を使って霊術が使える。そこには火や水といったたくさんの属性があり、魔法も霊術もそこは変わりない。ただし、闇属性は魔法、光属性は霊術でしか使えない。この説明で分かったか？」

「大体は理解した。けど、能力はどうなんだ？」

「能力については、さっき言った属性を一種類だけしか使えない。その代わり、その一種類の能力が高いのが特徴だな。」

なるほど、能力に関しては俺の世界と大差なしか。

「けど、能力は人間全てが使える訳ではないからな。確かに能力は強力だが、使えるのは一握りの人間だけだ。だから種族全体を見るとそこまでの脅威ではない。いや、”なかった”と言うべきか。」

「”なかった”ってのは？」

「氷夜は異世界人で能力者だな？何の能力かは分からないが白猪を倒したのも、足が治っているのもその能力のためだろ？」

まぁ、俺の場合は普通と違って随分と応用がきくがな。

「確かにそうだが、それがどうした？」

「天界に攻めて来ている異世界人もほとんどが能力者なんだ。
まさか人間にここまで苦戦を強いるとは思ってもなかったからな。」

あいつら、本気で侵略でもする気かね？

「って事は俺の立場は危ない訳だな。」

「……そうだ。」

「で、俺は神楽に見捨てられて、野垂れ死ぬ訳か。」
別に一人でも生きていけるけど、何となく神楽ともう少し一緒にいたかった。
俺が一緒にいたいと思うなんて、白夜とマゼリナ以外では初めてだな。

「いや、私もできる限りのことはするから！！」

俺が悲しげに振る舞うと、神楽は慌てて答えた。

（っく、何でそんな捨てられたら子犬のような目で私をみるんだ…）

「よし、じゃぁ、俺を神楽の家に泊めて。」

俺のお願いを聞いた神楽の顔は暗いものになっていった。
「すまない。黙ってるつもりじゃなかったんだが、私はこの国の姫なのだ。」
「という事は……」
「あぁ、すまな「俺を泊める部屋もあり余ってる訳だな。」」
「待て、聞いていたのか氷夜？
私は姫なのだぞ？」
「だから？」
「私の勝手で決める訳には…」
「……（捨てられた子犬の目）」
「そんな目で見られても…」
「……」
「私にも責任が…」
「……」
「そんな私を信頼仕切った目で見ないでくれ…」
「……」

「分かった、分かったから。
私がなんとかする。」
「（勝った。）」
思わずガッツポーズをしてしまった氷夜だった。

イレギュラー

神楽と楽しく話をしていた氷夜は急速に接近する大きな気配を四つ感じとった。

「神楽、ここらへんは魔物が多くでるのかい？」

「いや、そんな事はない。むしろ、ここは聖なる場所で魔物などめったに現れないはずなんだ。
氷夜が倒したでかい猪の魔物、”白猪”というんだが、あんな大物なら尚更ありえない。」

「そうか、なら今近付いてる奴らも、イレギュラーってことか。」

神楽は怪訝な顔をして周囲の気配を探った。
そして、”白猪”並みの気配を四つも感じ、みるみる顔が青くなっていった。

「駄目、急いで逃げないと！！」

しかし、四匹の魔物は既に小屋の周りを囲んでしまった。

「囲まれた……
仕方ない、氷夜だけでも逃げて。
氷夜が逃げる時間くらいは稼いでみせるから。」

「大丈夫だよ。だってほら、俺、白猪にも勝ったし。」

「それで死にかけてた奴が何をいう？
それに数も違うだろ。」

「それこそ、ほら、助けてもらった恩人を置いてはいけないぜ？」

俺の見立てじゃあ、神楽ではあいつらには十中八九、適わない。死にに行くようなものだ。

「氷夜、短い間だが、私は姫としてではなく、一人の神楽という女として氷夜と語らい、とても楽しかった。弄ばれた風もあったが、何分、姫の立場故にそんな体験もした事が無かったからな。
もしかしたら、私は氷夜に一目惚れ……したのかもしれないな。
だから、頼む。助けを呼んできてくれ。大丈夫、それまで私は死にはしないから。な？」

神楽はいつかの消え去った仲間と同じ顔をしていた。妙に達観したような顔。
何かを諦めたかのような微笑み。

また自己犠牲か……
俺の周りの奴らは好きだな自己犠牲。
残される者の気持ちなんて考えない自己満足。
もう懲り懲りなんだよ。

「自己犠牲ってのはな、生きて帰ってこれる強さを持った奴の特権なんだよ。」

「え？」

「自分に余裕がある奴だけが初めて誰かの為に犠牲になれるんだよ。死んじまったら、それは、ただの自己満足だ。」
俺は席を立って魔物が待ち受ける外へ向かった。

「待て、何を勝手な事をしてるんだ！？」

しかし、神楽は小屋の外には出れず、透明な壁に行く手を阻まれた。
そして俺の前には、足が三つもある巨大な鳥、白猪を更に大きくしたような巨大な赤い毛の猪、杖を持った猿、そして何よりもでかい蜘蛛。
後ろで神楽が絶句するのが分かる。

「”瑚鳥”に”赤猪”に”猿魔”、”土蜘蛛”まで…
無理だ、氷夜！！
こいつら全員、災害クラスの魔物だぞ！！
一人で相手するなんて無茶だ…
犠牲になろうとした事は謝るから、この壁を解いてくれ、頼む…」

神楽は今にも泣きそうな顔になっていた。

「駄目だよ、神楽。
これはお仕置きなんだから。しっかり反省しな。
これから俺が自己犠牲のお手本を見せてあげるよ。
後、これで助けられた借りはチャラだから。
後、俺の寝る部屋に高級ベッドを頼んだよ。」

俺の能力は重力を操る事ができる。
白猪を倒した時もそうだし、足の分子に無理やりマイナスの重力を働かせ、分離させた所で重力をコントロールし、元の姿に戻す離れ技までやってのける。
まぁ、俺の能力は重力操作という訳じゃないんだけれども。

氷夜は自らの内側に作用する能力を解除した。それは彼の体に普通の二千倍の重力負荷をかけていたものであり所謂、重しという奴だ。
因みに、一見細身に見える彼の体は信じられない程の筋肉が圧縮されており、重力操作をしなければ、氷夜の体重は三トンを上回る。

「さてと、さっさと片付けますかね。」

次の瞬間、氷夜の姿が消えた。

圧縮された筋肉から生まれる脚力は能力の補助なしに音速の壁を超

える事を可能にしたのだ。

†††††††††††††††

「（私は氷夜を怒らせてしまったのだろうか…）」

神楽は死を覚悟していた。時に、私が救った青年、氷夜は面白い奴で、私の姫という立場を聞いても態度を変えるどころか、私をからかって楽しむような、おかしな奴だった。
数時間しか一緒には居なかったのに確実に私の守りたい人の中に入りこまれてしまっていた。

だから、もしここで死んでも氷夜を守れたなら、その死に意味を見いだせるくらいには、彼の事が好きになっていた。

しかし、現実はどうだ？
今、私は彼の後ろで何もできずにいる。
この空間は霊術も発動せず、どうやっても抜け出せない。
そして、氷夜の前には災害級の魔物が四匹もいる。
勝てる筈がない。

そんか絶望的な状況の中から、氷夜は

消えた。

赤猪が倒れ、

土蜘蛛の足が飛び、

瑚鳥の羽が舞い、

猿魔が吹っ飛んだ。

†††††††††††††

俺はその場を蹴り、一瞬で赤猪の下までいき、蹴りを放つ。
衝撃を全て内側に集めたその蹴りは赤猪を内側から破壊しつくした。
更にその反動を利用し、土蜘蛛の足元に低姿勢で迫り、ブレーキ代わりに土蜘蛛の足に、回し蹴りを決め、そのまま粉砕する。
そして、その低姿勢から大きく跳躍し、体を回転させ、瑚鳥を三度蹴り飛ばす。音速を超える蹴りは、ほぼ同時に瑚鳥を捉え、そのまま地面に叩き落とした。
落下の際、右足に力を溜め、着地と同時に全力で猿魔に蹴りを放つ。
そこから生じる凄まじい衝撃波は猿魔の杖ごと猿魔の命を切り裂いた。

一瞬で土蜘蛛以外の命を奪いとった氷夜は悠々と、足を一本失い、

倒れている土蜘蛛のもとへむかった。

土蜘蛛は何があったのか理解できていなかったが、自分の身に危険を感じ、口からは毒針を、尻からは粘着性の糸を放ち、更に針のような四本の足で氷夜を串刺しにしようとした。

しかし、放たれた毒針は氷夜の手刀により叩き落とされ、糸は蹴りによる衝撃波で氷夜に届く前に吹き飛ばされた。

そして目の前に迫る鋭利な四本の足。だが、氷夜はそれらを避けずに、そのまま二本は手の平で受け止め、残る二本は普通に喰らう。

後ろから神楽の悲鳴が聞こえるが、実際、氷夜は痛くも痒くもなかった。

いや、ほんの少し血は出たが無傷といってよい程のものである。

高密度に圧縮された筋肉はそれだけで鎧となり、土蜘蛛の足をまったく通しはしなかったのだ。

そのまま、手で足二本を握り潰し、その足を手繰り寄せる。氷夜に引っ張られ、とんでくる土蜘蛛に肘撃ちをきめ、土蜘蛛は息絶えた。

じゃれあい

「ただいま、神楽。」

「えっと、お帰りなさい？」

俺が倒した四匹の魔物は既に消えていた。
この世界の魔物はそういうものらしい。

「神楽。」

「な、なんだ？」

「惚れ直しただろ？」

†††††††††††††

氷夜は私に意地の悪い顔で意地の悪い事を言ってきた。
何故、私は”一目惚れ”など言ったのだろう…

「あ、あ、あれは吊り橋効果という奴で一時の気の迷いだ！！」

自分の顔が真っ赤になっているのが分かる。
これじゃあ、氷夜の思うつぼなのに…
でも否定しない訳にもいかないじゃないか！！

「ふ～ん。」

しかし、言葉とは裏腹に氷夜は「大丈夫、俺は全部、分かってるから」みたいな視線を私に向けてきた。

「だ、誰が氷夜みたいな奴好きになるか！！！！」

私の必死の反撃に氷夜はたじろぎ……

あろう事か拗ねはじめた！！

「そうか……、俺って神楽から嫌われてたんだ…。」

何で、そんな世界の終わりのような声を出すんだ！！

「嫌いな訳じゃ、決してない。

えっと、そうだ、普通の友人くらいには思っているぞ。」

「神楽は普通の友人に一目惚れとか言って気を持たせる悪女なんだね？」

あ～！！

何で本当に私は一目惚れなんて言ってしまったんだ！？

いや、氷夜の事は嫌いな訳じゃないし寧ろ好意的に感じてはいるが、会って1日しか経っていない奴に惚れるなんて私が尻軽みたいじゃないか…

やっぱり、こういう事はお互いの事をしっかり理解しあってからの話だと私は思うんだ。

「どっちかと言ったら好きだが、それはまだ恋愛感情まではいっていない。」

「”まだ”、ね。」

墓穴を掘った！！

「あ～、もう知らない！！！！」

もう何を言っても氷夜のペースに巻き込まれると悟ったので、あきらめて、ふてくされる事にした。

しかし、端から見るとそれは、神楽が顔を赤くしてそっぽを向いているという状況であり、大人っぽい雰囲気の美人である神楽が子供のように拗ねるという、反則的なまでの破壊力を有しているものであった。

「そんな拗ねるなよ、神楽。
俺も悪かったからさ。」

「知らない。」

ぷん、とでも言うように顔を反らす神楽。

氷夜の目は微笑ましい者を見る目だった。

「本当に神楽はかわいいな。」

気がつくと、氷夜に頭を撫でられていた。
頭を撫でられるという行為と、「かわいい」という言葉で顔を最大限に赤く染め、俯いてしまう。
すぐに手を振り払おうとしたが撫でられている頭が思いの他気持ちよく、もう少しだけという誘惑に負け、結局は数十秒間、氷夜に撫で続けられてしまった。

「氷夜、さっきは自分勝手な行動をとろうとして悪かったな。」

氷夜によるなでなでが終了し、顔はまだ若干火照っているが、だいぶ落ち着いた私は先ほどの先走った行動を謝ることにした。

「反省したなら、俺と露天風呂に入れ。」

氷夜の顔はすごく真剣だが聞き取った内容はふざけたものだった。

「氷夜、私はまじめに謝っているんだから、まじめに聞いてくれ。」

さすがの神楽も呆れぎみである。

「と言われてもな、俺はピンピンしてるし、神楽も助かった。
で、神楽が反省してるなら別に、それでいいんじゃない？
大丈夫、襲わないから。
お酌でもしてくれれば充分だ。」

「はぁ。露天風呂の方は後ろ向きに考えておく。」

たしか、氷夜は私に助けられた借りと、高級ベッドでチャラにすると言っていた筈だったが、さすがに助けられた身でそこは指摘できなかった。

「あと、ありがとうな。
わざと私が傷つかないようにふざけた態度をとったんだろ？」

実際、氷夜の全く気にしていないような態度を見て、必要以上に自分を責めるような事をしないですんだのは確かだった。

まぁ、半分以上は素で私をからかっていたような気がしなくもないが……

「どういたしまして。」

氷夜は女なら思わず惚れてしまいそうな微笑みでそう言った。

「そろそろ出ないと、夜までに帰れないぞ。」
氷夜の微笑みをこれ以上見ているとまた顔が赤くなって、からかわれかねないので話を切り上げて帰る支度をした。
「神楽、俺はこのままで大丈夫なの？」
氷夜の服装は円では珍しい洋服だった。
「駄目ではないけど、洋服は円じゃ珍しいから、和服にした方がいいかな。」
「でも俺、金ないよ？」
「私はこれでも姫様だからね、それくらいのお金はあるから、大丈夫。」
「すまないな。
あとで、体で払う。」
「なな！？卑猥だぞ！！」
「いや、労働して払うって意味なんだけど…
そもそも俺は男なんだから無理だろ。
まったく、神楽はエロいな。」
「氷夜が勘違いさせるような事を言うからだろ！！」
それに、氷夜くらいかっこよければ需要がある気もするし……

帰り道も私と氷夜は随時こんなやり取りをしていた。
何だかんだ言っても、氷夜と一緒にいると楽しくて、これからの生活が今から楽しみだった。

そういえば、魔物の死体は今回も残っていなかった。おそらくは氷夜の能力によるものだろう。
白猪も氷夜が倒したから死体が残っていなかったのだ。
そう神楽は目星をつけ、それ以降その事には触れなかった。

こうして、氷夜も神楽もその奇妙な現象を気にする事もなく忘れていったのである。

†††††††††††††††

「今代の魔王は美味そうな気を放つ。」

氷夜達が後にした暗闇で淡い蒼色が踊っていた。

†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†
†

円の街

俺達は森の出口まで来ていた。

「外には私の見張りがいるから氷夜には私以外からは見えなくなる術をかけるぞ。」

見張りか、やっぱりお姫様は大変なんだな。

「なんで、見張りはこの森には入って来ないんだ？」

「この森は聖森といって王族以外は入れないんだ。」

少なくとも、天界人ですらない俺が居てもいい場所ではないな……

「俺がこっから出ていく所を見られたらたしかに、まずいな。」

「良くて死刑。悪くて公開処刑かな。」

どっちにしろ死ぬのかよ……

まぁ、俺は死んでも戻るんだけど。

「術をかけるからじっとしてろ。」

神楽の手から光が漏れ、俺の周りの光の屈折率が変わった。

「これでよし。

それから、外では能力をできる限り使わないでくれ。
天界人も人間も基本的に違いはないから、能力さえ使わなければ、バレることはないだろう。」

「了解。」

ようは、誰にも気付かれなければ問題ない訳だ。
周りの重力の歪みを感知する検索（サーチ）や、体の内部だけに作用している重しには影響はないだろう。

「で、いつまで俺は透明人間でいればいいんだ？」

「どこか人のいない場所を見つけたら、私が近くで待ってるから、氷夜はそこに行って、術を解いて私のところに来てくれ。」

「術はどうやって解けばいい？」

「誰にも見つからないように能力を使って解いてくれ。
できるか？」

「大丈夫だ。
じゃあ、そろそろ行くか。」

目の前に広がる円の街並みは昔の日本というよりも昔の中国に近いかもしれない。
しかし、西洋人風の外見の人や、髪の色が赤や青などの人が着物を着て歩く姿には多少の違和感を感じる。
ちなみに、神楽は動きやすいように、着物ではなく、巫女のような服装をしていた。

街には活気があり、市場には人が溢れている。

「氷夜、はぐれるなよ。」
神楽は俺だけに聞こえるようにつぶやく
「氷夜、この手はなんだ？」
俺と神楽は手を繋いでいた。
「はぐれないようにと思ってね。」
俺は神楽の耳元で囁いた。
「やめろ…

見張りに気付かれる。」

神楽は動揺しまいとし、繋いでる腕も周りから不自然に見えないように努めた。

しかし、神楽の声は色っぽくなっており、氷夜は更に調子にのって繋いでる手の指を絡ませた。

「な！？」

「ほら、気付かれちゃうよ？」

神楽の我慢する姿によけい意地悪をしたくなってしまう。

人のいないような場所を探すのは神楽に任せて、俺はしばらく神楽の反応を楽しませてもらう事にした。

「氷夜、あそこに人気のない空き地がある。
私はここで待っているから、行ってきてくれ。」

しばらく経って目的の場所が見つかった。

恥じらう神楽の姿を充分に堪能した氷夜は、満足してその空き地に向かっていった。

「この周りにある靄みたいなのが、光の屈折率をかえているのか。」
能力を使い、靄のような物に重力操作をし、無理やり霧散させ、術を解除する。
これで透明人間ではなくなった氷夜は神楽のもとに戻ろうとしたが、先ほどの場所には神楽だけでなく、神楽の知り合いであろう男が神楽と楽しげに話をしていた。

「神楽、待ったか？」
わざと馴れ馴れしく肩を叩く。
すると、神楽と喋っていた男は露骨に怪訝な目で俺を見てきた。
俺はスマイルをお返ししてあげた。
「氷夜か、随分と早かったな。」
「失礼ですが、神楽さんとはどういったご関係で？」

お～、怖い。
男は俺を睨みつけるだけでなく、体中から不快オーラを発していた。
「私から紹介しよう。
こいつは友人で、名前を氷夜という。」
「今は”まだ”、”普通の友人”の氷夜です。」
痛い！！！！
神楽の奴、バレないように思いっきり足を踏んづけやがった。
「で、こいつは、私が世話になっている道場の門下生で、雄也だ。」
「”神楽さんにいつもお世話になっている”雄也です。
どうぞよろしく。」
敵対心丸出しで握手を求めてきやがった。
まぁ、正直な話、今は神楽にしか興味ないし、他の人間など、文字通り眼中にない。
そもそもで、白夜とマゼリナ、そして神楽以外の人間がどうなろうと俺には関係ないのだ。
よって俺は、
「俺、神楽以外の人間は眼中にないんで。
行こうか、神楽。」
態度と言葉で握手を拒絶した。

ついでに神楽に気付かれないように男（既に名前を忘れた）に軽く殺気を浴びせる。

男は腰を抜かすことこそなかったが、足が震え、顔が恐怖で歪んでいた。

神楽の手を握り、強引にこの場を離れる。

「氷夜、いきなりどうした！？
またな、雄也！！」

男は恐怖で神楽に返事もできないようだった。

「どうした氷夜？何かあったのか？」

「いや、洋服だとやっぱり目立つみたいだから、早く着物に着替えたかったんだよ。」

言い訳としてはかなり信憑性があるだろう。
実際さっきから周りの視線が痛いし。特に男からの。

多分、神楽の手を引っ張って歩いたのが大きな原因だろうけど。

本当は氷夜の容姿が整っている為、女からも熱い視線が送られていたのだが、それこそ氷夜の眼中にはなかった。

「確かにそうだな。
ただでさえ氷夜は背も高くて目立つんだから。」

どうやら納得してくれたようだ。

「しかし、だからといって、私以外眼中にないなど、街中で言うのは冗談でも関心しないな。
いや、もう慣れたけどな……
若干諦めてもいるし。」

「諦めてくれ。」

最高の笑顔で返事を返す。

「はぁ〜。」

ため息をつかれてしまった。
今ので赤面してた頃が懐かしい。
といっても、まだ会ってから一日も経ってないが。

「ほら、あそこで服が売っているみたいだぞ?」

俺は見つけた服屋に向かう。

「氷夜、いつまで手を繋いでるつもりだ？」
俺と神楽はいまだに手を繋いでいた。
「いつまででも？」
「氷夜、そろそろ私も疲れてきたぞ。
それにこのままじゃ寸法も測れないだろ？」
「それもそうだな。」
神楽に嫌われたくはないので素直に従う。
退き際も肝心だ。

そして無事着物に着替えた俺を見て、神楽は決心したかのように言った。
「では行くとするか。」

「どこに？」

「我が家、王宮にだ。」

王宮にて

†††††††††††††††

着物に着替えた氷夜は王宮への道中、女性の視線を一人じめしていた。

無理もないか、慣れてきた私ですら、氷夜の着物姿に一瞬見とれてしまったからな……

こいつの場合は目の保養どころか、目に毒だ。

しかも中毒性のある毒だな。

第三者から見れば、美男美女のカップルにしか見えず、周りの反応としては、お似合いだと納得する者、嫉妬の眼差しや羨望の眼差しを向ける者と様々である。

しかし、神楽はこの街では有名（姫としての身分は隠しているが。）であるため、密かに思いを募らせていた男が多くいたせいか、氷夜は相変わらず嫉妬の視線も集めていた。

「神楽、さっきから羽を持つ者やら猫耳をつけた者を見かけるんだが、何なんだ？」

「魔人のことか？」

「魔人ってのはみんな見た目がどこか変わっているのか。」

「いや、そんなことはない。
魔人は天界人と違って種族が多いからな。
外面的特徴がある奴もいれば無い奴もいる。」

「そもそも何で天界に魔人がいるんだ？
仲が悪いものとばかり思っていたが？」

まぁ、氷夜の偏見も仕方ないだろう。

「確かに天界全体から見たら仲は良くないのだろうな。
だが、円の友好国である”神”の国王にして”四天神”である”帝釈天”殿が魔界の六大魔将である”阿修羅”殿とご友人であるから、円では魔人も普通に住んでいるんだ。」

「？」

どうやら知らないことばかりだったようで氷夜は困ったような顔をしていた。

「すまない、分からないことばかりだったか。」

「えっと…、”四天神”と”六大魔将”ってのを教えてくれないか？」

「四天神というのは天界全体の方針を決めている、四柱（にん）の神のことで、
帝釈天殿、
オーディン殿、

ゼウス殿、
ミカエル殿の四柱だ。
逆に六大魔将の方は魔界全体の方針をとっていて、こちらは魔界の種族の長がつとめている。
鬼神族、及び妖怪族の長、阿修羅殿。
冥界族の長、そしてゼウス殿のご兄弟、ハデス殿。
私が知っているのは、この二人のみだが、他にもヴァンパイア族の長、
堕天使族の長、
ダークエルフ族の長、
で構成されているらしい。」

「それだと五大魔将だよな？」

「よくは知らないけど、あと一人、魔王と呼ばれる者がいるらしい。」

「なるほどな。
しかし普通の人間はいないのに魔人はいるってのもおかしな話だな。」

「別に仲が悪い訳じゃなくて、能力者を除いたら天界にこれる人間がいないだけなのだがな。

っと、話が長くなってしまったようだ。もうすぐ王宮に着くぞ。」

見上げるように大きな王宮で、神楽と氷夜はもてなしを受けていた。

「流石にお姫様の友人となると扱いが違うね。
まさか氷夜”様”なんて呼ばれるとは思ってもみなかった。」

氷夜のことは私の友人と紹介したため、かなりの好待遇を受けていた。

ちなみに、侍女の間ではこの噂はおびれをつけて広まり、友人から瞬く間に婚約者に進化していたりする。

「氷夜、今日は遅いしもう寝よう。」

今日一日でいろんな事が有りすぎて、正直言って疲れてしまった。

「そうだね。
でも、これからどうする気なの？
ずっと友人で通すつもり？」

友人で通せなくはないだろうが、長い間ここにいる事を考えると避けた方がいいだろう。

「氷夜を私の近衛にしようと思う。」

私も一応姫なので、近衛を持つ事ができる。
しかし今までは私よりも強い人がカリスしかおらず、そのカリスも武官長でもあるから近衛を持つ事はなかった。
お父様からも心配だからとしつこく言われていたので、氷夜が近衛になってくれれば、私の近くにいても不思議ではないし、お父様の心配事も減り、一石二鳥である。

「それはいいけど、どうやったら近衛になれるの？」

「その話はまた明日にしよう。
今日は疲れたからな。」

「それもそうだね。お休み神楽。」

「ああ、お休み氷夜。」

私は自室に、氷夜は客室に戻っていく。

はぁ、今日は本当にたくさんの事があった……
そういえば、氷夜と知り合ってからまだ一日なんだよな。まるで旧知の友のように接してくるからそんな気がしない。

よくよく考えてみれば今日の私は氷夜に弄ばれっぱなしだった気がするな……。
これからは氷夜の主導権を握れるようにしなければ！！
決意を新たに神楽は眠りについた。

私の目の前で、師匠であるカリスと氷夜が睨みあっていた。
今にも戦闘が始まりそうな重々しい空気が闘技場を渦巻いている。
果たして、何があったのかというと、それは今日の朝まで遡る。

今日の朝食も氷夜が作ったものだった。
はっきり言ってここの料理長よりも美味い。

「ごちそうさま。
氷夜は本当に料理が上手いな。」
「ありがとう。嬉しいよ。」
「よし、そろそろお父様達の会議が始まるからそこで氷夜を私の近衛に任命してもらおう。」
氷夜を私の近衛に任命するのは私の一任でできる訳ではない。
国王であるお父様に任命して貰わなければならないのだ。
「今更だが、近衛というのは神楽の護衛をすればいいのか？」
「ああ、そうだ。
頼んだぞ、私のナイト様。」
よし、氷夜をたじろがせることに成功した。
氷夜の顔が少し赤くなっているのがわかる。
昨日の決心が功をそうしたようだ。
私は上機嫌で会議室まで向かった。

「神楽が近衛に認めるという事は、お主よりもそこの氷夜という者の方が強いということかのう？」

会議は速やかに進み、私はお父様への挨拶もそこそこに近衛の話を持ちかけ、それはうまくいっていた。

「えぇ、私では氷夜には勝てないでしょう。」

改めて確認すると、悔しかったが、今まで守られるという事が無かった為、その新鮮さが嬉しかったりもした。

「そうか、神楽が認めるならば良かろう。氷夜、お主を神楽の近衛に命ずる。」

「お待ち下さい！！」

水を差したのはいつかの求婚を求めてきた文官の男だった。

「そんなどこの馬の骨とも知らない奴を神楽様の近衛にするなど、賛成しかねます！！」

「「そうだそうだ！！」」

同意を示したのもやはり私に求婚を求めてきた者、もしくは私にやたらと話かけてくる者だった。

「静まれ！！！！」

武官長のカリスの怒声により、その場が静まり返る。
相変わらず凄い迫力だ。
私ですら多少のみこまれてしまっていた。
流石に氷夜は何ともなさそうだが。

「しかし、王よ、こ奴らの言う事も分からないでもありません。
実力が分からなくては不安になるのも仕方ないでしょう。」

「うむ……。」

雲行きが怪しくなってきたな。
カリスの発言はこの国においてかなり大きな意味を持つ。

「そこで提案なのですが、私と試合をし、それを見て決めるのはいかがでしょうか？」

「うむ、それはいい。
やはり儂としても娘の命を預ける者の実力は知っておきたいしの。
カリスがこの男を判断するなら間違いもないだろう。
では、氷夜とやら、これより、ここにいるカリスと試合をしてもらう。
準備が出来次第、闘技場で行うとする。」

で、現在の状況が出来上がっているのだ。
氷夜はあれから着物から動き安いものに着替え、剣も用意していた。

さすがの氷夜でも、カリスに勝てるとは思えなかった。
それほどまでにカリスは私にとって至高の存在なのだ。
しかし、氷夜の事だから万が一という事もあるかもしれない。それにカリスはもういい年である。
私は一応、氷夜に釘を刺すことにした。

「氷夜、カリスも年だからな、出来れば大怪我を与えるような事はしないでくれ。」

これで、カリスの反応がもし遅れたとしても大怪我をすることはないだろう。

それを聞き氷夜は困ったように笑い、闘技場の中心に向かっていった。
そこにはカリスが仁王立ちで待ち構えている。

「試合、開始！！」

お父様含める多くのギャラリーが見守る中、文字通り真剣勝負が始まった。

試合

†††††††††††††††

全く、神楽も無茶を言う…。
能力は使えず、その上相手を傷つけてはいけないという条件付きで俺に殺意むき出しのエルフ（またもや名前は忘れた）と戦えと言うのだから。

実際は”大怪我をさせない”であり”怪我をさせない”ではないのだが、氷夜の攻撃は一発でも当たれば大怪我となりうるので、氷夜にとっては同じ意味だった。

まぁ、俺が戦うんだから負けは有り得ないんだけどな。

自分の勝利を微塵も疑わず、氷夜は待ち構えているエルフのもとへと向かった。

向かいあうエルフから老体とは思えないような濃厚な殺気が放たれている。
もしかしたら、本気を出さなくてはならなくなるかもしれないな。
俺の世界では能力だけで事足りていたので、本気で体を動かすのは久しぶりだ。

エルフは刀を中段に構えて準備を完了している。
俺は特に構えることはせずに体の無駄な力を抜き、脱力した。
空気が張り詰め、

「試合、開始！！」

死闘が始まった。

最適に動いたのはエルフの方だ。
エルフは俺との距離を一歩で縮め刀を振り下ろす。

俺は右足で高速で迫りくるその刀の腹を正確にとらえ蹴りつける。
それによりエルフの刀は俺から大きく逸れた。
さらに俺は蹴りの勢いを利用して、剣で切りつける。しかし、エルフは低くしゃがんでそれを避け、足払いを仕掛けてきた。

なので、先ほどの蹴りに使ってまだ宙に浮いている右足で迫るエルフの足を思いっきり踏みつける。が、それは危険を察知し軸足を使って大きく後ろに跳躍したエルフにより避けられ、代わりに闘技場の地面を砕いた。
その右足を軸にして回し蹴りを砕いた拳大のかけらに当てる。かけらは寸分違わずエルフのもとに弾丸となって迫る。
避けられないと悟ったエルフは驚くことに刀でそのかけらを一刀両断した。
そしてお返しとばかりに俺の身長程もある火球を刀を持っていない方の手から放つ。
俺もその火球を一刀両断してみせる。
次は俺から距離を縮める。
距離が開いてしまえばエルフの霊術が飛んでくる。
能力を使えない今の俺では分が悪いためエルフを接近戦に持ち込む。
接近戦では俺の方が若干速い。しかし、エルフに怪我を負わせないという条件はなかなかに厳しく、そのため俺とエルフは互角の戦いを繰り広げていた。

「お主、勘違いをしておるじゃろう？」

二人の間合いが少し広がった瞬間、エルフは刀を下げ俺に話かけてきた。

「先ほどからまるで儂に怪我をさせないようにと振る舞っているように見えるのじゃが体術で勝っているからと言って傲り過ぎじゃ。」

「まぁな、あんた弱くて手加減が大変なんだよ。
それが本気じゃないんだろう？
だったら見せてくれよ、あんたの本気を。」

俺は久しぶりの肉弾戦に興奮し、このエルフの本気と戦いたいと思っていた。

「喚くな、若僧が。
いいじゃろう、力の差という物を教えてやろう！」

瞬間、エルフの周りが数多くのオーラで包まれる。

「今儂がかけたのは強化霊術じゃて。
体内のエネルギーを爆発的な力に変える火霊術【烈火】
大量のエネルギーを大気中から吸収し、無限の体力を生み出す、水霊術【癒】
肉体と頭の繋がりを電流で強化し、超反応を可能にする雷霊術【俊】
肉体を鉄のごとき硬さに変え、どんな攻撃も弾く土霊術【黒鉄】
周りの風を操り疾風のごとき速さを得る風霊術【疾】の五つじゃよ。
そして今の儂ならば……」

刹那、エルフが人知を超えたスピードで俺の後ろをとり、放った裏拳は俺の体を確実にとらえていた。

「音速の壁を超える。
なかなか強かったがの、自分の弱さ知れ、若者よ。
自分の力を過信した者に神楽様は渡せん。」

「それは残念。」

背後に現れた俺をエルフは驚愕の目で見た。
まぁ、それも仕方ないだろう。
確かにさっきの攻撃は致命傷とまでは行かなくとも、普通の者なら戦闘不能には陥っていただろう攻撃だった。

だが、俺の肉体は特別丈夫なため、攻撃に耐えきり、怪我をおう事すらなかった。
そして今の俺は既に重しを解いている。

「再開しよう、音を置き去りにした戦いを。」

エルフはすぐに動揺を納め雷撃を繰り出した。
さすがの俺も雷を避けることは生身のみでは無理なので左腕で弾き飛ばす。
おかげで、左腕は焦げてしまいひどく痛々しいが、超圧縮された筋肉の表面が焦げたところで戦闘に支障はない。また同じように音速を超えた事による衝撃波であちこちに傷があるが、これも問題ない。

俺はエルフに接近し超高速の肉体戦を楽しむことにした。
エルフが肉体強化をしてくれたおかげで、俺は怪我のことを気にせずに思う存分に戦うことができる。

俺の蹴りはエルフの纏う風により軌道を変えられ、その隙を逃さずエルフは俺に突きを放つ。俺は逸らされた足の膝を曲げてエルフが突き出す刀に踵をぶつけ、僅かに軌道をづらし、ギリギリで避ける。
さらにぶつけた足で踏み込み、エルフを斬り上げる。
しかし、エルフは【俊】による超反応で刀を放し、俺の剣を持つ腕を殴り、その反動を利用して俺の剣から逃れまだ空中に留まっている刀を再び掴み、体勢を崩した俺を斬りつけた。
俺は殴られた腕の勢いを殺さずに、剣をそのまま背中に持ってきてエルフの剣を迎え撃ち、剣を軸に体を回転させ脇腹に向けて裏拳を放つ。
それをもろにくらったエルフは体勢を大きく崩した。
その隙を逃さずに俺剣をエルフの首筋に当てる。

勝った。俺はそう思った。

しかし、一瞬後に俺はその間違いに気付く。
エルフに先ほどまでの”気”を感じないからだ。
そして俺の検索（サーチ）にも、これはエルフではないという結果が出た。

罠か！？
本物はどこだ。

検索（サーチ）を使っている暇はない。
俺は感覚を研ぎ澄ませた。刹那、背後から気の乱れを感じ、

俺は久しぶりに本気を出した。

「な！？」

「俺の勝ちだ。」

俺の剣はエルフの首筋に当てられていた。

「えっと……？」

審判は困惑しているようだ。
仕方ないか、途中からは俺達の戦いは断続的にしか見えなかっただ

ろうし。

「儂の完敗じゃ。」

「で、では勝者、氷夜殿！！」

この瞬間、俺は神楽の近衛に決まった。

治療

「爺さん、あんた強いな。」

俺を本気にさせたエルフに素直に賞賛を送る。

俺は久々のまともな攻防に満足し、少々テンションが高かった。

「お主の速さはどうなっておる？

霊術という訳では無かったし、能力という感じもしなかったがのう？」

「単純な体術だよ。」

「最後のもか？」

「あぁ、あれが俺の本気だな。」

エルフは苦々しい顔をしていた。

「本当に儂は手加減されていたようじゃの。

力を傲っていたのは儂の方だったのじゃな。

いやはや、この年になっても教えられるとは、世界とはやはり面白いのう。」

エルフはそういって豪快に笑った。

「王よ、この者の実力は本物です。儂が保証しましょう。」

観客席で、呆然と成り行きを眺めていた王は、大きく頷いた。
「では氷夜、これからは神楽のことをよろしく頼んだぞ。
では、これで解散とする。」

「氷夜！！！！」

神楽は俺の名前を呼び、は走りよってきて、一歩手前でブレーキをかけ、勢いを殺さずにきれいな回し蹴りを仕掛けてきた。

避ける事はしなかった。
というより意味が分からなかった。
なぜ、神楽はここまでご立腹なのだろう？

神楽の回し蹴りが俺の脇腹に決まり、低く大きな音が聞こえた。

しかし、俺の体は例によりめちゃくちゃ堅いので、ダメージはない。
むしろ神楽の足の方が痛そうだ。

「馬鹿者！！！！」

神楽は俺に向かって叫んだが、俺には怒られている意味が分からない。

「えっと…、相手に怪我はさせなかったよ？」

そうだ、条件もしっかり守った完璧な勝利だった筈である。

「誰が自分は怪我をしてもよいなどといった！！」

あぁ～、なるほど。
俺はやっと神楽が怒っている意味を理解した。
俺の体は傷だらけで、しかも左腕は焦げている状態だった。端から見たら満身創痍と言っていいだろう。
しかし、俺の怪我を心配してくれて怒っている筈なのに、怪我人にいきなり回し蹴りをする神楽もどうかとは思う。

「大丈夫だよ。
全身に切り傷があるし、左腕は焦げてるけど、元気だから。」
能力が使用できないから自然回復を待つしかないがな。
俺は異常に回復速度が早いから、一週間もしない内に完治するだろう。

「そんな傷だらけで、どこが大丈夫なんだ！！」
いやいや、本当に心配には及ばないんだけどな。
しかし人に心配されるだなんて、六歳以来か……

「ありがとう。心配してくれて。」
気がつくと俺は神楽の頭を撫でていた。
あっちの世界では俺の事を怖がる奴はいても心配してくれる奴はいなかったから。だから俺は神楽に御礼をした。

†††††††††††††††††††

私は怒っているのだぞ！？
なのに何でこいつは嬉しそうに私の頭を撫でているんだ？

勿論、私があんな無茶なお願いをしなければ、氷夜は怪我をしなかったかもしれない。だからこれは私のせいでもある。
でも、私だってあのカリスを氷夜が倒すだなんて思ってもみなかったのだ。

「とりあえず、治療室にいくぞ。」

「いや、それは俺の正体がバレる可能性があるから止めた方がいい。大丈夫、唾でもつけときゃ治るって。」

唾で治るような傷ではないだろう……
左腕に関しては一部炭化しているのだぞ？

「そんな適当な事を……」

「いや、マジで一週間ぐらいで治るから。」

「本当か？
だがしかし……
ではせめて私に手当てさせてくれないか？」

「神楽が唾をつけてくれるのか？」

とんでも無いことを嬉しそうな顔、といっても先ほどとは違ってニ

ヤニヤした顔で言ってくる。

「氷夜には唾以外の治療法はないのか……？」

「ない。」

即答で断言されてしまった。

「はぁ、とりあえず私の部屋に行くぞ、あそこなら救急箱が置いてあるから。」

氷夜を私の部屋までつれていき、椅子に座らせる。

たしかに氷夜の言う通り、治りが早いらしくもう傷口から血は流れておらず、浅い傷は既に塞がっていた。しかし、右肩、脇腹、右足にある比較的大きな傷は未だに開いたままだった。

「本当に傷が治り始めているな。

とりあえず消毒しなければ。」

私が消毒液に手をつけた瞬間、氷夜は批判的な声をあげた。

「唾で治療してくれないの？」

いやそんな、約束したはずじゃん！！みたいな感じで言われても……

「お前、本気だったのか？」

「かなり。」

今回も即答だった。

「俺、頑張ったじゃん。
エルフの爺さんも無傷だったじゃん。
だからさ、ね？」

「くっ……。」

確かに、そう言われると断り辛い。
それに、この怪我は私のせいでもあるのだ。

「仕方ないな、今回だけだからな。」

「よっしゃ〜〜！！！！」

怪我人とは思えない喜びっぷりだった。

無邪気に喜ぶ氷夜はかわいいなと思ってしまった私は重傷かもしれない。

私は諦めて氷夜の左腕をとり既に火傷程度の傷になっている怪我に舌を這わした。
試合が終わったあとのせいか少ししょっぱい。

「あっ……」

氷夜の色っぽい声があがった。

「恥ずかしいから、声を出さないでくれ。」

「まぁ、善処しよう。」

私はもう一度、氷夜の怪我に舌を這わせる。
今度は氷夜が我慢してくれているようで、声はあがらなかった。
でも、そしたら逆に氷夜の事が気になってしまい、氷夜のことを見上げてしまった。

目があう。

氷夜は顔を赤くし照れたように微笑んだ。

私は只でさえ、恥ずかしくて赤かった顔が真っ赤になるのが分かる。
急いで目線を外し、これは治療だと自分にいい聞かせて無心で氷夜の傷に舌を這わせ続けた。

順調に右足、脇腹、と”治療”を済ませていき、最後に右肩が残った。
しかし、右肩は氷夜の顔に近すぎて、恥ずかしいどころ騒ぎではない。
だが、氷夜が逃がしてくれるとも思えない。

意を決して氷夜に近づき、右肩を舐めた。
氷夜の息を感じる程の近さに、私は心臓が爆死するのではないかと思うほど、緊張している。

氷夜に抱きしめられた。

氷夜の突然の行動にかなり動揺する。

「ど、どうした？」

「あ、いや……ごめんな、自分でもよく分からないや。
いや、だったか？」

どうやら、氷夜もなぜこんな行動をとったか本当に分からないらしく、困惑していた。

私は氷夜の問いには答えず、氷夜に抱きしめられたまま、”治療”を続けた。

調味料は刺激的

†††††††††††††

本当にどうしちまったんだ俺は？

俺自身がこの状況を受け入れられずにいた。

神楽が俺のすぐ近くにいて、いい匂いがして、気がついたら抱きしめていた。

神楽は何もいわず、俺の腕の中にいてくれる。

神楽は温かくて、俺が久しく、本当に久しく忘れていた温もりを感じた。

「ありがとう。もう大丈夫だよ。」

「あ、あぁ。」

俺から離れると神楽は顔を赤くして、そっぽを向いていた。

そんな顔をされると、俺も照れてしまう。

とりあえず、この微妙な空気を、どうにかしなければ。

「神楽、汗かいたから風呂入ってくる。」

今は距離をおいてお互いに落ち着くべきだな。

「……分かった。」

用意をして風呂に向かう。場所は初日に案内されたので、大丈夫だ。

「……氷夜、思うんだが…」

神楽の部屋を出ようとしたら、神楽に話しかけられた。

「なに？」

「風呂に入るなら、私の治療は意味がないんじゃないか？」

気付かれたか。

「大丈夫。
凄く気持ちよかったから。
それに、献身的な神楽もかわいかったよ。」

俺は右手の親指を上げて満面の笑みで言い切り、急いで風呂まで逃げた。

「ふ、ふ、ふ、ふざけるな～！！！！！！」

後ろから何か聞こえたが、気にしない。

どうやらいつもの俺達に戻れたようで、安心した。

風呂も上がった夕飯、俺は神楽と共に、豪勢な夕飯を頂いていた。
「なぁ神楽、天界人は刺激的な調味料を使うんだな？」
俺の飯には味はしないがとんでもない物が入っていた。
「たしかにこの料理は香辛料が効いてはいるが、そこまでではないだろう？
氷夜はどの料理の事を言っているんだ？」
「どの料理にも共通して入ってるんだが…」
「具体的には？」
「俺の世界のマイトトキシンという物に近いがそれよりも強力だな。」
「へぇ、聞いたこともないな。どういった物なんだ？」
「俺の世界じゃあ、食べ物には入れなかったんだがな…。いや、そうでもないのか？
用途としては、蛇なんかが獲物に噛みついた時に注入して、極楽に送る時に使うな。」

「……それって、つまり毒を盛られてるのでは？」
やっぱりか…、しかし俺はこの宮殿に来て二日目だ。誰かに恨まれるような事をした覚えはない。
「調味料じゃないよな、さすがに。」
「聞いていいか？
なぜ、その猛毒入りの料理を美味そうに食べていられるんだ？」
俺は勿体無いと思い、毒入り料理を美味しく完食した。
「俺って、消化プロセスが他の人と違うから、毒とか効かないんだよ。」
食べた食べ物は足を直した時のように、原子レベルで分解されてしまうため、猛毒も俺には意味をなさない。
「いやいやいやいや、効かないとかそういう問題じゃないだろ！？
命を狙われているんだぞ！！
なぜ狙われるか心当たりはないのか？」
「俺が誰かの恨みをかうような事をする奴に見える？」
「……割と。
まぁ、この事はお父様にも言っておく。
要らぬ心配かもしれないが、気をつけてくれ。」

因みに事の真相は、無傷のカリスに、傷だらけの氷夜が勝ったという事を聞いた人がこれは、氷夜がカリスの弱みに漬け込んだのだという噂を流し、更に侍女達による”氷夜は神楽の婚約者説”も、氷夜が神楽を脅し、無理やり婚約したということにされ、神楽の部屋に氷夜が入っていったという事実（氷夜の怪我の手当てをした時）がこの噂に信憑性を増しさせた。
そしてこの随分と歪曲した噂を耳にしたある程度地位が高くて、神楽に思いを寄せる人達が氷夜の事を暗殺しようとしたのである。
それも一人や二人ではなく多くの者が、氷夜を亡き者にしようとしていた。

後に、最初に噂を流した者、そしてそれを鵜呑みにした者達は語った。
「あんなに容姿が良いくせにその上カリス様より強くて、神楽様と仲がよいなど羨ま…ではなく、ありえない。」
要は単なる妬みである。

余談だがその日の夜、俺は三人の女官、及び五人の貴族の令嬢から恋文を貰った。
全て返事は、
『俺、神楽以外は興味ないんで。』
で統一して手紙を返した。

だが、俺は神楽に恋をしてる訳ではない。
ただ、俺がここまで心を開くのは極めて珍しかった。

極端な話、神楽以外は恋愛対象どころか、俺にとっては存在価値すらない。
俺の世界には白夜とマゼリナそして神楽しか存在しなかった。

「氷夜、街に行こう。」
毒を山盛りに盛られた次の日の朝、神楽は俺にそう提案してきた。

「まぁ、構わないが。」

「あと、しばらくは戻らないから、荷造りもしっかりしてね。」

「街に泊まるのか？」

「そう、私の借り屋があるから。
私、ここみたいな肩っくるしいところ嫌いなんだ。
用はすんだし、早く街に戻りたい。」
生き生きした目で言う神楽を止められる訳もなく。

「りょ～かい。」

なんだかんだで俺も楽しみだった。

街にて

神楽はどうやら殆どの持ち物が借り屋にあるようで、荷造りに時間はさほどかからなかった。
俺に関しては、そもそも荷物がないので、神楽の用意が出来次第すぐに出発した。

「なぁ神楽、こんなに堂々と抜け出してもいいのか？」

俺達は今、王宮の廊下にいる。

「大丈夫だ、問題ない。」

仮にも一国の姫君がそろでいいのだろうか？

「以前、嫌になってここを出て行った時に、止めに入った衛兵を全て薙ぎ倒してかなり暴れてな。
被害が多い上に、結局止められないとわかって以降、私が見咎められる事はなくなった。」

「なるほど、やんちゃだったんだな。」

俺にも俺の世界で同じような事をしたので、神楽に何か言う権利はなかった。
まぁ、俺の場合はそんな生ぬるい話ではなかったが。

そんな事を話していると俺達に近づいてくる男がいた。
「これは神楽様、今からそちらに伺おうと思っていたのですよ。どうでしょう、久しぶりに帰られたのですから、私とお食事でも。」
俺の事はいないように振る舞う目の前の男はどうやら位が高いらしく、かなり豪華な服を着ていた。
見てくれも悪くない。
男はいきなり神楽の手をとり口付けしようとする。
俺は神楽を引き寄せ、頭に手をそえた。
「ごめんね、神楽は俺と今から用事があるの。」
俺は神楽の手を男の魔の手いや魔の唇から守った。
「貴様、愚民の分際で神楽様に触れるな!!」
凄い、眉がピクピクしてる。
「ほら、俺は近衛だし。
神楽を悪漢から守らなきゃね。」
「私を文官長と知っての狼藉とは、よっぽど死にたいようだな。」
「知るかよ、バーうっ……」
神楽は無言で俺の腹に肘鉄を加えてきた。

仕方ないので神楽からしぶしぶ離れる。
「氷夜が失礼をした。
これから街に出るから、すまないが、夕食を共にはできない。」
「いつお戻りになるのですか？」
うわ～、俺の時とは大違いの素敵なスマイルだな、おい。
「さぁ、気が向いたら、としか言えないな。
急ぎの用があるので私達はこれで失礼する。」
神楽の機嫌がいつになく悪い。
そして、逃げるように神楽は男から離れていった。
「愚民風情が調子に乗るなよ？」
男がすれ違いざま俺にしか聞こえないように呟く。
が、俺は特に気にする事はなく、三歩も歩かない内に男の顔も忘れた。
「氷夜、お前は子供か？
あと、頼むから人前でああいう事をしないでくれ。」
どうやらしっかり恥ずかしかったらしく、今更ながらに顔を赤くし

て抗議してきた。

「じゃあ、人前じゃなければいいの？」

「いいわけあるか！！」

「まったく我が儘だな。」

「はぁ、せめて王宮内ではそういう事はしないでくれ。」

「善処しよう。」

仕方がないのでそれで妥協することにした。

「最近、私はその言葉を信じられないんだが……はぁ。」

酷い言われようだった。

「そう言えば、急ぎの用ってなんなんだ？」

「あぁ、それはあの男から逃げる為の口実だ。
あの男、私に四回も求婚してきた上、事あるごとに食事に誘ってきてな。
全く、下心が見えすぎだ。
この間なんて、危うく部屋に押し掛けられそうになったからな。」

「ちょっとセクハラの罪で処刑してくる。」

俺は結構まじめに計画を練り始めた。

「大丈夫、いざとなったら一生立てないようにしてやるさ。」
そうは言うが、神楽も女の子である。そんなことに気を張っていては疲れてしまうだろう。現に、神楽の顔は男と会ってから少し曇っていた。
「安心しな、俺が守ってやるから。」
俺は神楽を引き寄せ、軽く抱きしめる。そして神楽の頭を撫でてやった。
「神楽も女の子なんだから、たまには弱くても良いと思うぞ。そのための近衛であり、俺だろう？」
「……あぁ。」
しばらく俺は神楽を無言で撫で続けていた。

「ありがとう。大分楽になったよ。
しかし、ものの数秒で約束を破るとはな。私もびっくりだ。
まぁ、今のは許してやるが、もう破るなよ？」
神楽が言っているのは”王宮内でそういう事をするな”という約束のことだろう。

「善処しよう。」

「はぁ、まったく。」

呆れたような声を出す神楽。
しかし、表情はさっきまでとは打って変わってご機嫌だった。

「じゃあ、気を取り直して街に行くか。」

†††††††††††††††

「おっ神楽ちゃん、今日は貝が安いよ！！
神楽ちゃんはべっぴんだからな、いっぱいおまけしちゃうぞ。」

「ありがとう。また後で寄るよ。」

相変わらずこの街の人達は愉快な人ばかりだ。

「神楽は人気者なんだな。」
氷夜は街の雰囲気についてこれないらしく、じゃっかん戸惑っている風だった。
「そんなことはない。
誰に対してもこんな感じだよ、この街は。
だから私はこの街が好きなんだ。
まぁ、氷夜も慣れてくれ。」
「たしかに、俺もこういう雰囲気自体は嫌いじゃない。
この果物はなんだ？」
氷夜もこの場所を気にいってくれたようで私はホッとした。
「それは、カイエだな。
甘くておいしいんだ。
買ってくか？」
「おや兄ちゃん、もしかして神楽ちゃんの彼氏かい？」
話しかけてきたのは八百屋のおっちゃん。
「はい、そうです。」
即答したのは氷夜。
「違います友人です。」
即否定するのは私。

最近は氷夜の扱い方にも慣れてきた。

「あらら、兄ちゃん振られちまったよ。」

「確かに、僕達は”まだ”友達ですが、ずっと友達のままとは限りませんよ？」

氷夜の奴、初日の私の失言をまだ言うか！！

「いいんね、兄ちゃん。
やっぱり物事は何でも前向きに考えなきゃな。
よし、そんな兄ちゃんに良いことを教えてやる。
神楽ちゃんはな、言い寄ってくる男は多いが、一緒に行動することはないんだ。
だから兄ちゃんは見込みあるぜ。」

「待て、そんなことはないぞ！！」

ここは何としても否定しなければ。
氷夜がまた調子に乗るのは目に見えている。

「じゃあ、最後に男と一緒に出掛けたのはいつだい？」

「つい一週間ほど前だ。」

よし、これで私が氷夜にからかわれる事はなくなった。

「へぇ、ちなみに誰と？」

「カリスとだ。」

おっちゃんが苦笑した。

「カリスって、あのお爺ちゃんだろ？
カリス以外だと最後に出掛けたのはいつだ？」

カリス以外、カリス以外…
脳内検索中……
該当する項目はありません。

「……黙秘権を行使する。」

そこには勝ち誇ったおっちゃんの顔があった。

「なるほど、それは良いことを聞いた。
おやじ、このカイエとやらを三つ程貰おう。」

「兄ちゃん、話がわかるねぇ～。よし、二つまけてやろう。
はい。じゃあこれで六百ユトいただくよ。」

「だって。」

氷夜は私に手を差し出してきた。

「その手は？」

「だから、お金。」

そういえば、氷夜は一文無しなんだった。

仕方ないので、氷夜に六百ユトを渡す。

「はいよ、おっちゃん。」

「あんがとよ、まさか神楽ちゃんを手懐けるなんてな。
兄ちゃん、応援してるぜ！！」

「おうよ！！」

さっきまで戸惑っていた氷夜は既に私よりもこの街に馴染んでいるきがする。

嫌な影

「初めてのデートはどう？」

氷夜の顔は意地悪な顔だった。

「初めてじゃないし、そもそもデートでもない！！」

もう、おっちゃん……

余計なことを氷夜に教えんなよ……

あとで、奥さんにおっちゃんが酒場の女性にナンパしていた事を告げ口しようと心に誓った。

「氷夜、気付いてるか？」

それは複数人の気配。

私でも何とか分かるような極少のものだった。

おそらくは手練れの暗殺部隊だろう。
その気配は、私達が王宮を出た瞬間から感じられたがせっかくの楽しい気分を台無しにするのも嫌なので今まで黙っていた。
しかし、そろそろどうにかしなければならないだろう。

「ああ、勿論。
毒を盛った奴とも関係してるかもな。」

「どうする？」

私と氷夜なら正面から戦えば負ける事はまずないだろうが、寝込みを襲われたりするのは厄介だ。

「俺が何とかしておくから、先に借り屋に行っといて。」

「それは危なくないか？
そもそも氷夜は借り屋の場所を知らないだろう？」

「それは大丈夫だ。
俺は神楽がどこにいても、どんな状況で、どんな事をして、どんな服を着ているのかも分かるからな。」

「……ストーカー宣言か？」

暗殺者よりも氷夜の方が危険なのでは？

「集中すれば、下着も……っと。」

「分かったら殴る！！」

くそ、氷夜も学習したのか私の言葉と同時に放たれた拳をしっかりガードしてくる。

「チュッ」

しかし、信じられない事に、氷夜の奴は受け止めた私の手の甲にキスをしやがった。

「じゃあ、夕飯までには帰るから。

美味しい夕飯を期待してるよ。」

私が我に帰る前に氷夜は急いでその場を去っていた。

……はぁ、まったくあいつは。

しかし、満更でもないと感じていた自分がいることも確かだった。

†††††††††††††††

今の俺は割と不機嫌だ。
暗殺者がデートを邪魔したから？
違う。暗殺者など俺にとっては気にする価値もない物だ。
ではなぜ、俺はここまで不機嫌なのか、それは奴らから懐かしい、そう俺の元いた世界の匂いが微かにするからだ。
しかし、この暗殺者達は俺の世界の奴らではない。
おそらくは、間接的に関わっているのだろう。
「さて、ここまで来ればいいだろう。」
俺は街外れの薄暗い空き地にきていた。
街中では目立ちすぎるし、神楽の好きな街を壊したくはないからだ。
検索（サーチ）によると、殺者は九人、その内二人が神楽のもとに向かっていた。
「お前らの相手は俺だろ？」
俺は神楽に向かった二人に重力によって次元を歪めて作った、”亜空間の扉”（通称どこでもドア）を遙か離れた二人と、周囲にいた七人の足下に展開する。
それをくぐった九人は俺の前に落ちてきた。
流石にプロというべきか、何が起きたか理解できていないだろう状況でも俺がやった事だと判断して取り乱すことなく、数に利がある

と分かるや、俺を取り囲み始めた。
「俺が誰かを知って刃を向けるか？
いや、知るわけないか…」
俺の世界じゃぁ、俺を見た奴の反応は、逃げるか、懺悔するかのどちらかだったからな……
刃物を向けられるのは久しぶりだ。
「せっかくだけど、神楽が待ってるからあんまり遊んでられないんだ。」
しばらく俺の様子を見ていた暗殺者達は一斉に襲いかかってきた。
しかし、暗殺者達の刃が氷夜に届くことはない。
暗殺者達は一人を除いて黒い物体に突き刺さり息絶えていた。
「未知物質（ダークマター）」
これは俺が使える闇の力。俺の世界では、闇は曖昧なものではなく、ブラックホールによる超重力により変化した未知の物質、つまりダークマターが闇とされていた。
黒く禍々しいそれは闇の力の一角であり、能力発動が周りにバレないように力を限りなく弱めた物である。
俺が使える重力と闇の力は強力だが、それでも俺の本来の能力の副産物に過ぎない。

「貴様、人間か！？」

あえて一人残しておいたのは、その懐かしい匂いの元を探るためである。

「おまえ、俺の他にも能力者に会ってるだろ？」

「……」

沈黙を決め込んだ暗殺者はこれ以上喋る気はないらしいが、俺はそれでも構わない。

「別に喋らないでもいいよ。」

俺は闇の力を使い、暗殺者を拘束し、喉を潰した。

「むしろ叫ばれたりした方が厄介だ。」

喉を潰され、殆ど瀕死状態の暗殺者の頭に手を添える。

「検索（サーチ）」

この業は相手の脳を直接調べることもできる。

どうやら、この暗殺者は依頼主の顔も名前も知らないようだ。

しかし、依頼主の使者が能力者で、おそらく俺の世界の奴だろう。

つまり、この国のお偉いさんが俺の世界の奴らと何か企んでいるらしい。

暗殺者は息絶えて、倒れた。

この検索（サーチ）の使用法は脳に負担をかけ過ぎてしまい、使用された者は死亡してしまう。

九人もの命を奪った氷夜はしかし、特にそれを気にすることもなくその場を立ち去った。

というのも、これくらいは氷夜の世界では日常茶飯事であり、むしろ軽い方だと言えたからだ。

う～ん、最近は俺の周りに結構な暗殺者がいるからな……。

しかも俺を狙ってる奴は一人じゃないらしく、お目当ての、俺の世界の奴とつるんでる誰かを絞り込むのはできなくはないが、大変である。

面倒なので、俺か神楽に害の無い限りは放っておく事にした。

「さてと、神楽にお土産でも買って帰るかな。」

俺はちゃっかりと暗殺者から金目の物を奪っていたので、神楽にお土産くらい買えるお金を持っていた。

俺、及び、暗殺者から奪った物に付着した血の匂いを分子レベルで分解し、薄暗い空き地から、光が射す神楽のいる街に歩いていった。

神楽、初めての料理

俺は暗殺者の物を換金し、神楽のお土産に鍵をモチーフにしたお洒落なペンダントを買った。

神楽が危険な目にあっている時、いつでも俺がいれるわけではないので、俺はそのペンダントに保険をかける事にした。

それに”どこでもドア”の概念を付属させ、一度のみ好きな場所に行く事ができる。

というもので、万が一神楽が危険な目にあってもこれで即逃げる事ができる。

保険もかけたので、俺は検索（サーチ）により、神楽の現在地を探し、そこに向かった。

††††††††††††

氷夜が去った後、その空き地には髪の蒼い美女が佇んでいた。

「何て美味しいのかしら。」

そこにある筈の死体は消え去り、代わりに満足そうな彼女の笑顔があった。

「絶対に魔王になってもらうわ。私のためにもね。」

††††††††††††

「ただいま。」

言葉通り、氷夜は夕飯前に借り屋に着いた。

「時間通りだな。

部屋の割り振りやら、家の説明なんかは後にして、とりあえず夕飯にしよう。」

私が作った料理は……おにぎりだった。

「…悪かったな、それしかできないんだ、私は。」

そう、私はこれでも姫だから、王宮の生活では誰かが食事は作ってくれたし、ここにいる時も、ご飯はカリスのとこで頂いたり、街の定食屋で食べていたので、料理をした事がなかったのである。

「あ～、まだ時間あるし、一緒に何か作るか？」

くっ、男の氷夜に教わるのもしゃくだが、料理はできた方がいいと思い、私は氷夜に料理を教わる事にした。

「うん、いい感じ。
神楽はやればできるんだから、このまま続けていけばすぐに上達するよ。」

氷夜の教え方は親切で、分かりやすかった。
褒めて伸ばすタイプらしく私はさっきから褒められっぱなしだ。
もちろん、褒められる事に嫌な気はせず、むしろやる気が湧いてくる。

「いたっ！」

だが、少し調子に乗ってしまったのか、誤って包丁で指を切ってしまった。

「見せて。
ちょっと傷が深いな。」

次の瞬間、氷夜は私の指をくわえた。

「氷夜、待て、早まるな！！」

私の抵抗も虚しく、氷夜に腕をつかまれ、指を氷夜の口内で舐められる。

氷夜はこういう事も絵になるな…
私は心配そうに私の指をくわえる氷夜にいつしか見とれてしまっていた。
こういう時、容姿がいいとは得だと思う。

気がつくと、私の指に痛みは無くなっていた。

「氷夜、もう大丈夫だ。」

しかし、それで止めてくれる氷夜じゃない。

氷夜は一瞬いつもの意地悪な顔になり、舐め方が明らかに治療のそれではなくなっていた。

……氷夜、なんかエロいぞ！！

その色気ただよう所行に、少し興奮してしまっている私は氷夜の思う壺なのだろうが、今の氷夜相手ではしょうがないと思う。

「ふぅ～。」

やっと開放された私は茹だっていた。

「氷夜には、唾以外の治療法は思いつかないのか！？」

「うん。」

いつものように即答だ。

「それに治ったでしょ？」

確かに、私の指は治っていた。

「氷夜、治ってからもしばらく舐め続けたよな？」

おそらく、痛みが無くなった時には既に傷は治っていた。

「ソンナコトハナイヨ？」

物凄くカタコトだった。

「もういいよ、取りあえず料理をを終わらせちゃおう。」

私は氷夜のこういう事に、もう慣れてしまい茹だっても、すぐに持ち直せるようになっていた。

「「頂きます。」」

自分で作ったとは思えないほど美味しかった。
いや、もちろん氷夜に手伝って貰ったのだが。
しかし、それを差し引いてもこの美味しさには驚きである。

「うん神楽、美味しいよ。」

氷夜のお墨付きも貰えたことだし、これからは自炊もしようかな？

「神楽、渡したい物があるんだ。」

食後、氷夜はそんな事を言ってきた。

「なに？」

「はい、これ。お土産。」

それは鍵をモチーフにしたお洒落なペンダントだった。

「……氷夜、万引きは犯罪だよ？」
氷夜はお金を持ってない筈だ。
「違うよ、ちょっと持ち物を換金して買っただけだから。」
「そ、そうか。」
どうにも照る臭くて、素直に受け取れなかった。
が、氷夜は何を勘違いしたのか、ペンダントを私に付けてきた。
「似合ってるよ、神楽。
あと、それに少しおまじないをかけといたから。
強く祈れば、好きな場所に一回限りだけ行くことがてきる。
危ないと思うような事があれば、それで逃げてくれ。」
「……ありがとう。」
少し俯きぎみだったが、しっかり言えた。
「じ、じゃあ、家の案内をしちゃおうか。」
私は気恥ずかしいのを誤魔化すように、そう言いった。
「そうだね、神楽の部屋を確かめなきゃ。」
「なんで真っ先に私の部屋なんだ！？」

こうは言っているが、氷夜は私を襲ったりはしない。私が本当に嫌がる事は絶対にしないのだ。

その後、家の案内をして一日が終わった。
ちなみに私の部屋には入れなかった。
戻ってきたばかりで散らかっているので、そんな物を見せたくはない。

「今日はなんだか騒がしくないか？」

私達は今、家の食料を昨日の料理に全て使ってしまったので、街の定食屋にいるのだが、氷夜の言う通り街が騒がしい。

「あぁ～、そう言えばゼウス殿が円に訪問されるのが今日だったな。

」

「神が来るのか。
……何かあるな。」

「何かって？」

「いや、気にするな。
それよりも神楽は王宮に戻らなくてもいいのか？」

話を誤魔化された感はあるが、それ以上追求しようとは思わない。
誰にだって言いたく無いことはあるもんな。

「それは大丈夫だ。
私がいなくても、何も問題ない。」

氷夜はそれを聞いて安心したようだ。

そして、私達は氷夜のに比べれば劣るが、それでも充分に美味しい朝食を食べ、お祭り騒ぎの街を二人で楽しむことにした。

神羅？

†††††††††††††††

ここは王宮の客室であり、その豪華な部屋にゼウスはいた。

「どうした葵？
いや”トウテツ”と言った方がいいのか？」

「私が”トウテツ”って呼ばれるのが嫌いなの知ってて言ってるでしょ！？」

ゼウスの背後には、いつのまにか、空き地に現れた蒼髪の美女がいた。
いや、正面から見た彼女は美女というより、大人びた美少女といった方がしっくりくるだろう。
葵という美少女は”美しさ”を絵に描いたような容姿であり、体型であった。

「おまえと喋るのも久しぶりだな。
たしか、この辺の洞窟が湿度気温ともちょうど良くて暗いから高級ベッドを持ち込んで寝てたんじゃなかったのか？」

「あなた達が食べられてくれなくて、お腹減って仕様がないから、ふて寝してたのよ。」

「神を喰おうだなんてさすが”食欲”だな。

だから、”覇族”は神との戦闘を禁じられたんだろうけど。」
「やめてよね、”食欲”とか、”トウテツ”って呼ぶの。
私には”葵”っていう名前があるんだから。それに私はグルメなだけ！！
はぁ、もう約束なんて破っちゃおうかしら。」
「いくらおまえでも神相手じゃ良くて相討ちだろうな。
しかも勝ったら勝ったで今度は”覇族”と神々に殺されるし。」
「分かってるわよ、そんなこと。」
「で、どうしたんだ？
おまえが俺に会いに来るなんて”不可侵条約”が決まって以降じゃないか？」
「そうそう、ゼウスの好きそうなネタを仕入れてきの。
この国に剣技だけならあなたよりも上かもしれない奴がいるわ。」
「ほ～、それは確かに俺好みの情報だ。
で、そいつは今どこにいるんだ？」
「街のこの場所よ。
ちなみに、そいつの名前は”氷夜”よ。」
彼女は街の地図を広げて氷夜達の住む借り屋を指さした。
「分かった、暇を見つけて手合わせ願おう。」
「ええ、そうしてちょうだい。

用は済んだからもう行くわ。」

別れの挨拶もなく葵はゼウスの前から消え去った。

†††††††††††††

「氷夜、今は帰って夜にまた来よう。

昨日も一昨日も舞いの稽古を怠ってしまったから、昼間は涼しい聖森で舞の稽古をして、夜に戻ってくればいい。

やっぱり祭りは夜に楽しむ物だしな。」

神楽はよっぽどお祭りが楽しみなのだろう、急かすように俺を引っ張った。

「でも神楽、俺は王族じゃないんだから聖森には入れないのでは？」

「……そうだった。」

どうやら忘れていたらしい。

「じゃあ、俺はこの辺ぶらぶらしてるから。」

「知らない女に声をかけられても冷たく当たっちゃ駄目だぞ？」

「普通、そこは逆なんじゃないか？」

「いや、氷夜の場合は対応が冷たすぎるんだ。
昨日だって彼女達、泣きそうだったぞ。」

おそらく、昨日会った女の事を言っているのだろう。

俺の容姿やら力に引き寄せられて言い寄ってくる女は昔から山のようにいる。
しかし、そんなもの俺からしたらウザいだけだ。
だから、いつからか俺は周りの女に拒絶のオーラみたいなものを出すようになっていた。
ちなみに神楽は特別だ。
なぜって”俺”が気に入ってるんだから当然だろう。

これまでは隣に神楽もいたから俺に言い寄ってくる女はいなかった。
（いちゃもんつけてくる男は何人かいたが。）

だが昨日、店で少し神楽と離れてる間に、女に声をかけられた。
俺は神楽のもとに戻ろうとしていたので、かなり不機嫌になった。
だから上から見下して軽く睨んでしまったのだが、そのせいで女達は声を掛けたはいいが、その後が続かず、その硬直は神楽が事態に気付くまで続いた。

「まぁ、善処する。」

「氷夜はいつもそれだな…
じゃあ、行ってくる。
夕方までには帰るから。」

「俺も神楽の周りは警戒しとくけど、一応、”鍵”は肌身はなさず持っていてくれ。」

「あぁ、分かった。」

そういって神楽は聖森の方へ歩いていった。
もちろん、彼女の周りは検索(サーチ)をかけているので、何かあれば、”どこでもドア”ですぐに駆けつけられる。

「さて、俺は能力者達が何をしているのか調べるかな。」

俺の睨んだ通り、能力者達はゼウスの来訪に合わせて何か仕掛けるようで、街のあちこちから能力者の匂いがした。

「あいつは……。」

あいつらが何を企んでいるのかを調べる内に、俺は見覚えのある顔を見つけた。

「”風神”、明(あきら)。」

それは、俺と白夜が所属していた、いや、俺達を生み出した組織、

”神羅”の幹部であり、俺達の友”だった”もの。そしてマゼリナを泣かし、白夜を苦しめたものだ。

「神楽と俺に実害がないなら放っておくつもりだっんだけど、明が絡んでるならそうもいかないな。」

実際、今すぐ明に襲いかからなかった事を褒めて欲しいぐらいだ。しかし、神楽が好きな街で明を相手する訳にもいかない。

「とりあえず、情報収集かな。」

そう言って氷夜は明るい街から闇の広がる路地に消えていった。

神羅？

そこには氷夜と、三人の横たわる男がいた。

「ぐはっ！！」

そして今、男がまた一人息絶えた。

大体事情は掴めたかな。

俺は路地でこそこそ動きまわっていた能力者の匂いがする奴、三人に何を企んでいるのかを聞き、もちろん、普通に教えてくれる訳もないので検索（サーチ）を使用させてもらった。

掴めた情報によると、

・人間が雇った天界人がゼウスの周りを調査している。

・武器を密輸入している。

・最初に俺を狙った暗殺者とは関係ない。

・今夜、人間達が何かしかけるらしい。

・人間達の居場所はわからないが、依頼されたのは酒場である。

つまり、明達はゼウスを暗殺しようとしているわけだ。

しかし、いくら明でも神を殺すことは難しいだろう。

おそらく、暗殺は円の国が企んだことにして、ゼウスの国と円、上手くいけば円を利用して”神”とも戦わせる。そして弱った所を人間、いや”神羅”が横から勝利を掠めとるという作戦だろう。

「まぁ、やり口は汚いが効果的ではあるな。」

とりあえず、”神羅”の能力者を見つけて、奴らのアジトを探さなくては始まらない。

明は検索（サーチ）で追跡していたが、どうやら気づかれたらしく、もう居場所はわからなくなっていた。

やはり、さっき殺すべきだったか？

いや、それだと神楽を悲しませてしまうだろう。

仕方ない、まずは依頼を受けた酒場に行ってみますか。

「三人はいるな。」

今までは街中に匂いが蔓延していて分からなかったが、酒場に入った瞬間、能力者の濃い気配が三つあることに気がついた。

「しかも三人とも”１ｓｔ（ファースト）”クラスか。」

”１ｓｔ”とは、”神羅”における能力者達の強さのことで”１ｓｔ（ファースト）”、”２ｎｄ（セカンド）”、”３ｒｄ（サード）”と分けられている。

この数字が若いほど、強い能力者だ。

ちなみに、幹部は全員”１ｓｔ”クラスの上、”Ｇ（ゴッド）”クラスに属している。

「さて、どうおびき出した者かね～？」

「おい、作戦に支障があった。

すぐにここから離れろ。」

俺は能力者達の座る席に近づき、小声で話しかける。

「私たちは何も報告はうけていないぞ？」

俺は自分が能力者だと分かるように、微弱に力を漏らした。”３ｒｄ”クラスの能力者には力のコントロールが上手くできない奴もいるから手っ取り早く、味方だと思って貰える。

「この場所に兵士が大勢向かっている。
どうやら、ここに犯罪者がいるらしい、奴らが来たら犯罪者を捕まえるまでここに閉じ込められちまう。
それを知った俺が真っ先に伝えにきたんだ。」

「しかし、我等がここを動く訳には……」

「ここから逃げろという訳じゃない。
とりあえずこの酒場から出ればいい。
外で待っていても支障はないだろ？」

三人はどうするか話あった。

「まぁ、確かに。」

「連絡網が途切れる方が大変だからな。」

「分かった。
ひとまずここを出よう。」

「なら、裏口から出よう。
兵士に顔を見られたくないからな。」

俺達は酒場の裏口から外に出て行った。
そして俺は立ち止まり。
「おい、どうしたんだ？」
付いて来る三人の足下に”どこでもドア”を開いた。
「「「うわっ！！」」」
俺もそれをくぐり抜け、たどり着いたのはこの間、暗殺者を相手した空き地だった。
「てめぇ～、裏切り者か！！」
「まったく、”３ｒｄ”クラス風情に騙されるとはな。」
「しかし相手が悪かったな、俺達は”１ｓｔ”クラス。
しかも”Ｇ（ゴッド）”クラスに最も近い位置にいる。
”ケルベロス”といった方がわかりやすいか？」
「……いや、知らないし。」
俺の顔を見ても驚かなかったということは、俺が死んで何年かした後に”神羅”に入ったのであろう。
しかも”ケルベロス”って…
実力が伴わない通り名ほど痛い物はないな。
”１ｓｔ”クラスと”Ｇ（ゴッド）”クラスには超えられない大きな壁がある。

それは生まれた時から決まっている事なのだ。
この三人が”G(ゴッド)”クラスに行くのは適わぬ夢だろう。

「先輩が良いことを教えてやるよ。
俺は氷夜。
元”G(ゴッド)”クラスといった方がわかりやすいか？」

「は？
嘘ならもっと増しなのをたのむぜ。
そんな力のコントロールもできてない奴が、”G(ゴッド)”クラスになれる訳がないだろう？」

「……いや、俺は聞いた事がある。
偶然見ちまった組織の機密ファイルに三年前、組織を牛耳っていた”G(ゴッド)”クラスの男、”氷夜”の事が記してあった。」

お～、俺の事は機密扱いにされましか。
まぁ、当たり前だけど。
しかし、あれから三年も経ったのか、結構長いな。

「ただの偶然だろ。」

「えぇ、それにもしそうだとしても私達三人がかりなら”G(ゴッド)”クラスだって倒せるはずです。」

「そうだな！！」

……いや無理でしょ。

次の瞬間、俺の足下の土が膨れ上がり、鋭い岩が俺を串刺しにしようと迫ってきた。
俺はそれを避けるが次々と地面から鋭い岩が俺を目掛けて迫ってくる。
全て避けるのは厳しいと判断し、どうしても避けられないものは蹴り飛ばし、破壊する。

だが、それは俺の決定的な隙だった。

全ての岩を難なく避けたと思った刹那、雷撃が放たれた。それと同時に、足下から岩がを俺を逃がすまいと現れ、檻のようにとり囲む。
雷撃が俺を直撃。
更に俺の足下から間欠泉のように炎が吹き出し、トドメとばかりに頭上から巨大な岩が俺を押しつぶす。

「どうだ、これが”ケルベロス”の力だ！！」

「いえ、まだ敵は生きてます。」

「やっぱ体術だけじゃ勝てないな。」

よっぽど今の攻撃に自信があったのだろう。
三人は無傷の俺を見てかなり驚いている様子だった。

俺は、俺の周りを重力によって歪め、全ての攻撃を無力化したので無傷だ。
そして、この空き地を囲うように同じ物を発生させる。

「これで俺が暴れても、街に被害はないな。」

俺は重力を使い、空気を操った。
そして、三人の中心にサッカーボール程の球体が現れる。

「！？」

いい反応だ。
球体が現れた瞬間、三人はそれから離れた。

「だが、遅い。
”空気爆発（クード・バーン）”」

空気を圧縮した為、その分この空間の大気濃度が下がっており、三人は反応したはいいが、酸欠により速く動くことができずに、圧縮された空気が元に戻ろうとする爆発のような衝撃をまともにくらった。

「まだ終わりじゃないよ。」

俺が操り圧縮したのは水素と酸素。
よって、俺が少し火種を作ってやれば……

「「ドーン」」

その場に巨大な火柱が上がった。
俺は周りを歪めており、尚且つ、酸素供給も他の空間と繋げる事で行っていた。

だから俺はこの火柱によるダメージも無いし、この空間の酸素を全て使用したが酸欠にもなっていない。

「へ〜、今ので死なないのか。」

やはり”１ｓｔ”クラスは伊達じゃないか。
三人はボロボロになりながらも立っていた。

「だが酸欠でもう動けないんじゃないか？」

「はぁ、はぁ、まだだ。」

「あれ、やる、ぞ。」

「あぁ、もうそれ、しかな、い。」

三人は一カ所に集まり、最後の力を振り絞って能力を発動させた。

「「「「£％＃＆＊」」」」

現れたのは、顔が三つある五メートル程の犬、地獄の番犬こと”ケ

ルベロス”だった。
能力によって生み出されたそれは、体は鉱物でできており、雷をまとい、火の息を吐いている。
三人はそれで力尽き倒れた。

「ごめん、そろそろ俺、飽きてきたわ。」
この戦いにカリスとのような精神の高揚はなく、はっきり言ってつまらなかった。
俺は”未知物質(ダークマター)”を剣状にし、取り出し、重しを解く。
「一瞬で終わらせてやるよ。」
音速を超える一太刀は、”ケルベロス”の纏った雷を破り、その体を切り裂いた。
「「「&#%£＊※♂」」」
三人が最後の力で呼び出した”ケルベロス”は現れてから何もできずに消えていった。
俺は倒れている三人の頭に検索(サーチ)をかけ、明の居場所を突き止める事に成功する。
「お祭りまでには、終わらせなきゃね。」

神楽とのお祭りに思いを馳せながら、氷夜は明を殺しに向かった。

神羅？

†††††††††††††††

俺は子供の頃の出来事によって、他人を信じられずにいた。
例外は、白夜とマゼリナ。
白夜は俺の唯一の家族で、マゼリナは俺達の心を救ってくれた、心優しい女の子だ。そして今は、白夜の恋人でもある。
マゼリナのお陰で俺は他人を好きになれないまでも敵だとは思わなくなっていった。
白夜に関しては、友達までつくるようになった。

「明、明日は休みだろ？
三崎（みさき）と、翔（しょう）連れてどっか行かないか？」

「あぁ、いいぜ。
三崎と翔には俺から連絡をとっとくよ。」

「白夜、私は～？」

「バーカ、俺が行くのにマゼリナが行かないわけないだろ。」

そして、互いに見つめ合い笑いあう白夜とマゼリナ。
イチャイチャするのは構わないが、見せつけるようにするのはやめ

てくれ。

「氷夜も行くから、六人か〜、遊園地にでも行く？」

俺が行くのは決定らしい。が、明日は用事で出かけなければならない。

「悪い、俺は明日パスだ。」

「え〜〜〜〜〜」

不満そうなマゼリナ、だが明日は実は極秘で仕事が入っているのだから仕方がない。

「そう言うなマゼリナ。
兄さんだって忙しいんだよ。」

「でも”どこでもドア”使えばすぐに追いつけるじゃん！！」

「悪いな、明日は夜遅くまで用事があるんだ。」

「それにしても、”どこでもドア”なんてネーミング、子供みたいだよな。」

明はおかしそうに笑った。俺は青い狸の物語が好きなんだ。悪いか？

「安心しろ、別に俺は嫌いじゃないぜ。」
豪快に笑って意味不明な事をいいながら背中をたたく明。
おかしそうに笑ったのはお前だろうが。

「触るな。」
俺は明が好きじゃない。
まぁ、嫌いでもないから普通と言った所だろう。
ほとんどの人間を嫌っている俺が普通という評価をつけるのだから、
そこそこは良い奴なのだ。

「ちぇっ、つれないねぇ～」

しかし、今日の明はあまり元気がない。

「どうした？
風神ともあろう明が、今日は元気ないな？」

白夜も気付いたらしく、心配そうだ。

「”また”女の子にでも振られたの？」

マゼリナ、それは逆効果だと思うぞ？

「ったく、お前ら馬鹿ばっかりだな。
よし、明日は俺が奢ってやるよ！！」

明は無理やり元気を保とうとしているが、何か思いつめている感を隠しきれていない。
だが、俺も白夜もマゼリナもそれを深く追求する気はなく、白夜とマゼリナは奢ってもらえる事を素直に喜んでいた。

「残念、氷夜。
お前は明日来ないんだよな？」

明は何故か勝ち誇っている。
悔しくは無いがむかついたので、反撃する事にした。

「そうか、彼女に送るプレゼント用のお金が浮いちまって有り余ってるんだな。」

「なんだとコラー！！」

「「アハハハハハ」」

白夜とマゼリナは腹を抱えて爆笑した。

「ったく、笑ってんじゃね～よ！！」

次の日。

予想以上に仕事が長引いてしまい、戻るのが遅くなった。

突然、携帯がなりメールが届く。

『兄さん、会議室に来て。』

訳が分からないが、とりあえず会議室に向かった。

そこにいたのは、泣きそうな白夜と、それに寄り添い泣いているマゼリナ。

そして、”水神”の由香里(ゆかり)と”地神”の薫(かおる)の死体だった。

どちらも”神羅”の幹部で白夜とマゼリナの友人。
昨日まで笑いあってた奴らだ。
部屋の状況は酷くボロボロで、”水神”の由香里、”地神”の薫、その他にも”雷神”の三崎、”炎神”の翔、そして”風神”の明による傷もあった。
俺達以外の幹部が全て裏切った。
いや、俺達が裏切り者として処罰されたという方が適切か。
しかし、白夜とマゼリナは幹部を総動員しても殺せない。
それほどまでに”創造神”の力と”原始の吸血鬼”の力は強力だった。

「ごめん、死んでくれ。兄さん。」
俺を殺せば大量のエネルギーが生まれる。
そしてそのエネルギーで、白夜はマゼリナの故郷へと道を繋ぐ気だろう。
白夜はこの世界に絶望してしまったのだ。

「まったく、我が儘な弟を持つと苦労するな。」

「あぁ、ごめん。」

「弟の我が儘を叶えるのも兄の仕事だよ。」

そして白夜はロンギネスの槍を手に持ち、それを一閃。
俺は死に、次元の扉が開いた。

†††††††††††††

「ここにいるのか、明。」

そこは街外れにあった貴族の別荘だった。
さすがに貴様の別荘だけあってかなり大きな構造をしていた。
中からは光が漏れ、少なくとも１ｓｔクラスが十五人はいる。
一際大きい気配は明のものだろう。

「正面突破、かな。」

俺は堂々と正面のドアに向かった。

「誰だ貴様！！？」

ドアの前にいたのは見張りと思われる２ｎｄクラスのゴツい二人。

「未知物質（ダークマター）」

鋭い形状をしたそれが見張り二人が何かする前に心臓に突き刺さる。

「な、何事だ！？」

それでもバレてしまったようで、建物内の奴らが応戦状態になってしまったのが分かる。

だが俺は気にする事なくドアを開ける。

「何のようだ？」

入ってすぐは大広間になっており、十七人の能力者がいた。

俺は右手を突き出し、握りしめる。

勝負は一瞬。

いや勝負にすらなっていない。

すでにそこには、球場の超重力に捕らわれ、ビー玉程度の大きさになった物が十七個転がるのみとなっていた。

「やっぱり検索（サーチ）を使わなくていいから楽だな。」

検索（サーチ）を使用しなくても良くなった今、氷夜は手加減抜きで力を使用できた。

「さて会いに来たよ、明。」

†††††††††††††††

「明様、侵入者です。」

「あぁ、分かってる。」

この懐かしい気配は氷夜か。
あいつ生きてたんだな。

俺が殺したのも同然なのに氷夜の生存を感じて俺は僅かながらも喜んでいた。

「でも、今回の任務は失敗か〜。
保険に期待でもしますかね。」

俺はおそらくここで殺されるだろう。
それくらいの事をしたんだから当然だ。

「なぁ、氷夜。
俺はもう疲れちったよ。

だから、最期にお前と華々しく舞って散りてぇや。」

いつか来ると思っていた死に神の足音が近付いてくる。

†††††††††††††††

「久しぶりだな、明。」

「そうだな、三年ぶりか？
しかし、全然変わらないな氷夜は。」

「お前は変わったがな。」

「同感だ。」

三年前と変わらぬ距離感に懐かしさを覚えるが、同時に怒りも込み

上げてくる。

「なぜ俺達を裏切った？」

「お前達も知らない、お前達の事を聞かされてな。
それで、俺達はお前達を殺すしかなかった。」

「俺達の知らない、俺達のこと？」

たしかに、俺達は自分自身のことをよく分かってはいない。
その秘密に俺達を裏切った訳があるのだろう。

「氷夜、もういいだろ？
お前だってこんな話をしに来た訳じゃない筈だ。
お前が死んだあの日から俺達はもう終わっていたんだから。」

「そうだな。
ここでは狭いな。場所を変えよう。」

俺は”どこでもドア”を開く。

「懐かしいね～、”どこでもドア”じゃん。
まだこれ、”どこでもドア”って呼んでんの？」

「まだ、も何も、これからもずっと、これは”どこでもドア”だが？」

「アハハハハハ
やっぱり氷夜は変わらないな。
本当、あの頃に戻りたいねぇ～。」

明は悲しげに笑った。

「あぁ。

だが、もう俺達は変わりすぎちまった。」

「分かってるよ。」

これをくぐったら俺達は殺し合うのだろう。

それを知ってなお、俺達はこれをくぐった。

神羅？

くぐって出た所は山の頂上付近だった。

「ここなら、被害も出まい。」

「久しぶりだな、氷夜と喧嘩だなんて。」

俺が明を嫌っていた頃、こいつはやけに俺をかまう為、何度となく喧嘩になった。

「俺が負けた事は無かったけどな。」

「だが、今日も勝てるとは限らないぜ？」

明の周りに風が集まる。
そして明は姿を変えた。
服装は装飾品が多くついた美しいものになった。
髪も伸び、その色もエメラルド色に変化した。
右手には槍を持ち、周囲に風が吹き荒れる。

”神格化”、今、明が行ったそれであり、自身を”風”という概念そのものに変化させるというものだ。
”神格化”すれば同じ、概念による攻撃しかくらわず、まさに神のごとき力を得ることができる。
これが、１ｓｔクラスとＧ（ゴッド）クラスを分ける越えられない壁だ。

「俺も少し本気を出すか。」

重しは既に解いている。
更に重力を操ることによってスピードを上げ、体の周りは空間を歪ませ、防御膜を張る。

「冷たい黒炎”リリス”」

俺の周りを黒い炎が燃え上がる。
それは”未知物質（ダークマター）”の本来の姿であり、超重力によって分子レベルにまで動きを止められた物質は絶対零度でありながらも高エネルギーにより、黒い炎を生み出した。
そして生み出した黒炎は燃え移った対象をエネルギーに変換し、自らを大きくする。
よって、黒炎が広がった場所には何も残らない。
しかも、それは概念重力から生まれた物であるから、”神格化”した明にも攻撃可能である。

黒い炎から放たれる冷気でそれとは対照的に周囲は白く染まった。

「全てを略奪する剣”バルムンク”」

虚空から取り出すのは禍々しいオーラを纏う漆黒の剣。
これは白夜から貰った剣で俺がこの剣に流し込んだ能力を何倍にも増幅してその身に宿す事ができる。

「”神格化”も無しに概念を操るとか、いつ見ても規格外だよな。」
俺は左手を突き出し握りしめる。
今回は明を中心とした半径二十メートル程の重力球を生み出し、瞬時に圧縮した。

「遅いな。」

気がついた時には明は俺の後ろにいて、いとも簡単に防御膜を破り俺の腹に槍を突き刺していた。
だが、それも予想の範囲内。
俺はそのまま槍ごと明を燃やそうと”リリス”を迫らせる。

「あっぶねぇ。」

しかし明はとっさに槍を手放し消え、すぐに離れた場所に現れた。
槍は”リリス”によって消え去りその代わり”リリス”は勢いを増した。

「やっぱり厄介だね、”一体化”って奴は。」

明は風の概念となることで周囲の風、もっと言えば空気のある所にならばどこにでも移ることができる。
炎や雷と違って、何処にでもある空気との”一体化”はかなり強力である。

俺は腹に空いた穴を分解、再構成し修復した。

「いや、お前の再生能力のほうが厄介だから。」
明は手を振り上げそして下ろした。
それと同時に先程の槍が無数に俺に向かって落ちてくる。
俺は”バルムンク”を一閃。その衝撃波に触れた物から漆黒の炎に染まり、俺にたどり着く物は無かった。

気がつくと明は俺のはるか上空にいた。
そして、新たに現れた柄しかない槍を振り下ろす。
それは明が得意とする風による”不可視の刃”。
しかもそれは超巨大であり、はるか上空から余裕で俺に届くものだった。

俺は周りを”リリス”で被い”不可視の刃”に対抗する。

迫り来る”不可視の刃”は”リリス”に触れると同時に炎上した。
しかし、その大きさは予想よりも遥かに大きく、”リリス”によって燃え尽きる前に俺に肉迫する。
俺は”バルムンク”を盾に身を守った。
次の瞬間、死角から”不可視の刃”が現れ燃え上がった。
どうやら明が柄のみの槍を振り下ろしたのはフェイクで実際はその”不可視の刃”のみを複数操れるようだ。

間に合わないと悟った俺は死角に現れた”不可視の刃”を概念重力によって墜落させる。
更に縦横無尽に現れる”不可視の刃”。
それを俺は”バルムンク”で切り裂き、概念重力で墜落させ、”リリス”で燃やし尽くす。
一秒にも満たない時間で千を超える殺りとりを俺と明は交わしてい

た。

「なぁ、楽しいな氷夜。」

”不可視の刃”による攻撃が止む。

「俺は楽しくない。」

「そんな笑って言われても説得力がないぜ？」

どうやら笑っていたらしい。

事実、俺はこの戦いにカリスとの戦闘とは比べものにならない精神の高揚を感じていた。

「このまま、時がとまれば最高なのにな。」

「どんな物にだって終わりはあるさ。

それは俺ですら例外じゃない。」

「ま、その通りだよ。」

明は俺の視界から消える。その代わり、俺の周りに竜巻がいくつも現れ、風の刃となって俺を襲う。

”リリス”は今までの攻防により勢いを増しており、竜巻を難なく防ぐ。

その複数の竜巻は俺を中心として回転し始めた。

それは、俺を囲むような風の檻を発生させる。

その勢いは”リリス”をも巻き上げるほどのものだった。
そして、上空から龍の形をした風が、風の檻を通って俺に迫る。
俺も”リリス”を”バルムンク”に纏わして力を倍増させ、荒れ狂う力を黒い龍の形に宿し放った。

明の放った風龍は風の檻を巻き込みより巨大になって俺を襲う。
俺の放った黒龍は風龍とぶつかり、噛みつき、食いちぎろうとする。
風龍は燃え上がり、そして爆発した。
おそらく、最初から爆発するようにできていたのだろう、おかげで黒龍もろとも俺の”リリス”は飛び散り、今、俺を守るものは無い。

明が槍を構えて俺に迫る。どうやら風龍の後ろにあらかじめ潜んでいたようだ。
俺は明が俺の攻撃範囲に入るのを待ち、入った瞬間、”バルムンク”を一閃。
しかし、切られた明は煙のように霧散した後に炎上した。

これもフェイクか！？
だがそれはカリスの時のような幻影とは違い、概念である風と概念となった明との見分けをつけることは不可能だった。

次の瞬間、俺は死角から殺気を感じ、体を捻る。
が、攻撃を避けきることはできず、左手が切られ、風と消えていった。

「今のは殺せると思ったんだがな。
まさか避けるとは流石、氷夜だ。
しかし、いくらお前でもすぐに再生はできないだろ？」

確かに、空気中から必要な物質を集め、左手を再構成してはいるが、

すぐに元に戻すことはできそうもない。

「俺の勝ちだな。氷夜。」

「そうでもないさ。
明、俺はお前がそこに来るのを心待ちにしてたよ。」

明がいる場所、そこはちょうど最初に明が立っていた場所だった。

「”空気爆発（クード・バーン）”」

最初に明の周りを圧縮した空気は明に避けられた後も、そのままそこにあった。
俺はそれを利用し”クード・バーン”を放った。

「俺に爆風が効くとでも？」

明は平気な顔で周りに風を張り巡らせ、俺の攻撃を防いでいた。
だが、俺の狙いは爆風による攻撃ではない。
元の半径二十メートルの大きさまで戻った所で、俺は概念重力により球場の形を維持するようにし、その周りを”リリス”で覆った。
爆発した風龍の概念のかけらをも燃やし尽くした”リリス”は半径二十メートルの球体を完全に覆えるほどになっていた。

「どうしちまったんだ！？
なんで”一体化”ができないんだよ！！」

球内から聞こえる明の声。

俺は圧縮した空気を全て俺の概念下、つまり未知物質（ダークマター）に変えていた。
”空気爆発（クード・バーン）”により明が”一体化”できる空気を押しのけ、俺の未知物質（ダークマター）が明の周りに充満し、普通の空気とほぼ変わらないそれに明は気付く事ができずに、まんまと俺に捕まったという訳だ。

「俺の勝ちだ、明。
永遠に溶けぬ夜よ来たれ”氷夜”」

俺と同じ名前のその技は、球場に閉じ込めたその中から全エネルギーを奪いとる。
そうして造られるのは永遠に変わらない氷細工。

だが、今回は失敗したようだ。
明は瀕死だったが、まだ生きていた。

「負けたよ。
やっぱり氷夜は強いな。」

概念となった明の体は足の方から徐々に薄くなり、その命を散らしていった。
明はいつもの苦笑を浮かべながら言葉を紡いでいく。

「最後まで、”神格化”しなかったのは、俺のためだろ？」

「お前が弱っちかっただけだよ。」

嘘だ。

確かに俺が”神格化”してしまえば勝負はすぐについただろう。
しかし、そうしてしまえば明は完全に消え去り、もう二度と生まれ変わることすら許されない。
明の事が嫌いならそうしていただろうが、いくら憎くても俺は明の事は嫌いにはなれなかった。
勿論、好きでもなかったので、やっぱり普通だ。

「氷夜らしいな。
その悪人に成り切れない所、俺は好きだったぜ。」

「俺は、明の俺を嫌わない所が嫌いだったよ。」

「そういう所、本当に氷夜らしいや。
白夜とマゼリナに会ったら謝っておいてくれないか？
なんだったら代わりに土下座しておいてくれ。」

「誰がするか。」

明はそれを聞いて笑った。
俺もつられて笑ってしまう。

「最期にお前と笑えて、俺の人生も悪くは…なかっ…たな。」

明は風になって消えていった。

「俺、やっぱりお前の事、嫌いだったのかな？
涙も流れないし、何も感じないんだよ。
なぁ、明……。」

神羅？

俺は借り屋に戻っていた。
神楽と約束した夕方になっていたからだ。

「ただいま～。
悪いな氷夜、少し遅くなった。」

「お帰り。」

「どうしたんだ氷夜！？」

神楽はとても心配そうな顔で俺に駆け寄ってきた。

「何で私を見て泣くんだ！？」

「え？」

自分の頬に触れるとそれは濡れていた。

明、俺はお前の事、結構好きだったみたいだぞ。

嗚咽をもらす訳でも悲しみに浸る訳でもない。

ただ単に涙が止まらなかった。

近寄ってきた神楽は無言で俺を抱きしめた。

「氷夜は強い。
だけど、たまには弱くても良いと思うぞ？
その弱さを許す為に私がいるんだ。」

いつか俺が神楽に言ったような言葉を神楽は俺にかけてくれた。

俺はこの優しい温もりに感謝し、それを失いたくしたくないと思う。
しかし同時に、俺はいつか神楽の為にこの温もりを自ら手放す日がくると心のどこかで悟っていた。

†††††††††††††††

氷夜のこんなにも弱々しい姿は初めてみた。
いつもおちゃらけていて、それでいていつも私を守り、救ってくれる氷夜は今は私の腕の中で、泣いていた。
その泣き顔はまるで泣き方を知らない子供がただ涙をながすようで、いつもと変わらない顔に涙だけが流れていった。

「なんで泣いているのか聞いてもいいか？」

「タマネギを切ったんだ。」

いつもの真剣な口調で、ふざけた事を言ってきた。
多分それは、氷夜なりの拒絶なのだろう。

「それは随分と強力なタマネギだったんだな。」

だから私も深くは追求しない。

「あぁ、強力なタマネギ、だったよ。」

氷夜は笑いながらそう呟いた。
だが、その笑いに悲しい響きを含んでいるのを感じ、氷夜を抱きしめる力を強くする。

「神楽、ありがとう。」

その言葉に返事をする事はせず、いつかのように氷夜を抱きしめ続けた。

いつしか氷夜の涙も止まり、その顔には微笑みが戻った。
私はこの時、どうしたら氷夜を元気付けられるか考えていた。
今から祭りに行っても氷夜は疲れてしまうに違いない。
それに実は祭りは明日が本番なので、必ずしも今日行く必要はなかった。

……一つだけ確実な方法があるにはあるんだよなぁ。
だが、それをする決心がつかないでいた。

「ごめん、出るのが遅くなったね。
じゃあ、お祭りに行こうか。」

いつもと同じように振る舞ってはいるが、それが空元気なのは私でもわかる。
私は覚悟を決めた。

「氷夜、祭りは明日もあるから、明日行けばいい。
今日は疲れていそうだし、これから温泉にでも行かないか？」

「温泉か……しばらく入ってないな。」

氷夜は私の提案を喜んで受け入れた。

はぁ、落ち着け私。

今、私達は街の温泉宿に温泉だけ浸かりに来ており、私は氷夜がいる露天風呂に酌用の酒を持ち、入ろうとしていた。
もちろん、この宿は姫の権限を全力行使し、貸切にしてある。

そう、これはあの時、後ろ向きに考えさせて貰っていたことであった。

はぁ、まさか私が男を体を張って元気付ける日がくるとはな……。

それは今まで頑なに交際を断ってきた神楽にすれば有り得ない事である。
神楽はそれをしてでも氷夜に元気になって欲しかった。
それくらい、神楽にとって氷夜は大切な人になっていたのだ。

「べ、別に好きって訳じゃないんだからな。」

誰に向けたかも分からない言い訳を一人呟く。

「よし、入るぞ。」

私はなるべく音が出ないように露天風呂に続く戸を開けた。

そこには、腰にタオルを巻き、温泉の縁に座る氷夜の姿があった。
どうやら氷夜は月を見ているようで、私とは逆の方向の空を見上げていた。
その姿は美しく、そして儚い。
私は思わず見惚れてしまっていた。

どれくらい氷夜に目を奪われていただろうか。
さすがに少し寒くなってきた頃。

「ねぇ、いつまでここにいるの？
ここは男湯だよ？」

氷夜は最初から気付いていたらしい。
当たり前か、いつでも私の周りを警戒してくれている氷夜が、私がここに入ってきた事が分からない訳がない。
どうやら氷夜はこちらを見ないように、ずっと月を眺め続けていてくれたようだ。

変な所で紳士なんだよな氷夜は。

「こっちを見ても大丈夫だ。ちゃんとタオルを巻いている。
いつかの提案を呑んで、ほら、露天風呂で酌をしに来てやったぞ。
ただし、襲うなよ？」

「あ～、そんなこともあったね。
悪い、冷えちゃったでしょ？
早く湯船に浸かりなよ。」

「あ、あぁ。」

若干緊張しながらも湯船に浸かった。
近くで見るほぼ裸の氷夜はいつもより肌に赤みが増して、普段よりも更に色っぽい。

「はい。」

私は氷夜にお酌をする。

「神楽、いつも以上に綺麗だな。」

そんなことを氷夜に真剣な顔で言われてしまう。

「思わず襲っちまいそうだ。」

「それは約束違反だろ？」

心のどこかでそれでも構わないと思う自分がいたが、それ以上に氷夜はそんなことはしないと私は知っている。

「肩を寄せるのはセーフだよな？」

そういって氷夜は肩を寄せ、私の肩と触れる。

「ギリギリだがな。」

私もそれを拒まなかった。

「なぁ神楽、大切な物ってのは当然にそこにあるようで、案外脆い物なんだよな。」

なぜだろう、私は急に氷夜がどこかに行ってしまうんじゃないかという不安にかられた。

「氷夜、ずっと私のそばにいてくれるよな？」

氷夜は意地の悪い顔になる。

「そうだな、神楽がディープなキスをしてくれたら考えなくもないな。」

「調子にのるな。」

氷夜の額を人差し指で押す。
この時、私は氷夜の答えを氷夜なりの肯定として捉えた。
氷夜の目が僅かに曇ったことにも気づかずに。

キスより先にまず告白が先だろ！！

私はその時、顔を赤くしてそんな事を考えていた。

「ペロ」

私が塾考している間に氷夜は私の首もとに顔をよせ、舌を這わせた。

「な、なにを！？」

「神楽は美味しいね。」

「ぶさけるな！！」

「アハハハ」

そんなふざけあい、じゃれあいはその後、二人がのぼせるまで続いた。

寝顔

「……ここはどこだ？」

私は浴衣で布団に寝かされていた。

「たしか、露天風呂で…」

あの後、氷夜が私のことをからかってきてそのまま……

「のぼせちゃったのか。」

「あっ、起きた？

まったく、のぼせて倒れるまで俺と遊びたかったの？」

「あぁ。

良かった元気になったみたいだな。」

まだのぼせているのか意識が朦朧としており、私は氷夜の意地悪にも真面目に答えていた。

「不思議だよね、神楽って。

俺、どんどん神楽に惹かれてるよ。」

神楽はまた眠ってしまい、その言葉が届くことはなかった。

「ほら神楽、何か飲まないと脱水症状を起こすよ。」

体が揺さぶられ、氷夜が私を呼ぶ声が聞こえるが、私はまだ起きたくない。

「眠い。」

「とりあえず、水だけでも飲んで。」

「わかったわかった。」

話半分で私は返事をし、それを実行する気はなかった。

「仕方ない、口移ししよう。」

「！？」

瞬間、私は氷夜から距離をおく。

危なかった、危うく私のファーストキスがこんな情けない理由で終わるところだった。

「遠慮しなくてもいいのに。」

「氷夜のおかげで一気に目が覚めたよ。」

そして、覚醒した私はあることを疑問に思う。

誰が私を着替えさせたんだ？

「なぁ氷夜、まさかとは思うが、氷夜が私を着替えさせたのか？」

「いや、残念ながら女将さんがそれはやってくれたよ。」
よかった、氷夜なら理由があったら喜んでやりそうだからな。
「でものぼせた神楽をここまで運んだのは俺だよ。」
全然よくなかった……
「氷夜、まさか私に何かしてないよな？」
「さ～て、それはどうでしょう。」
氷夜はこの上なく意地悪な顔になっていた。
私はとりあえず体に異常がないかを確認した。
「あと神楽、下着を脱ぎっぱなしにするのはどうかと思うよ。」
「なっ！？」
そ、そういえばあまりにも緊張しすぎていて、下着やら服やらをしっかり片付けるのを忘れていた！！
「俺の前以外でそういう事はしちゃ駄目だよ？」
「く、屈辱だ……
せっかく氷夜が喜ぶと思ってやってやったのに…」
もう顔は赤いし、不甲斐ないし、氷夜にはからかわれるし最悪だ。

「神楽、ありがとう。
おかげで俺はかなり救われたよ。
でも今はお水を飲んで暫くお休み。」

氷夜は私の近くに腰を下ろすと、私の頭を手で持ち上げそこに自分の膝を入れて私の頭を戻した。

「ほら、膝枕。」

「普通は逆じゃないか？」

「じゃあ、今度は神楽がしてね。」

「前向きに考えておく。

それにしても、氷夜は良い匂いがするな。」

今夜はよく眠れそうだった。

††††††††††††

まったく、無防備に眠っちゃって。

俺は暫く、神楽の可愛い寝顔をつついたりして堪能した。

「なぁ神楽、自分でしといてアレだけど、俺はいつまでこの状態でいればいいんだ？」

「ん～。」

寝息で可愛いお返事が帰ってくる。

「明日の朝までには、足が痺れて動けなくなっているかな……」

「おはよう、氷夜。」

やっとお目覚めですかお姫様。

俺はアレからずっと神楽の寝顔を眺めて過ごしていた。

俺は一晩くらい寝ないでも平気だが、俺の足は感覚が既に無い。

「おはよう。

悪いんだけど、頭どけてくれない？」

「すまん！！

ひょっとして一晩中膝枕してくれていたのか？」
「神楽の寝顔が可愛かったから許す。
それに、ほっぺもプニプニだったしね。」
「そうか氷夜、で、痺れたのはここか？」
神楽は今まさにビリビリしている部分に触れる。
「……あぁ、そこだな。」
「そうか……。」
無言で刺激を与え続ける神楽。
地味にけっこう痛い。
「ちょっと神楽、地味に痛いんだけど？」
「なぁ氷夜、覚えておいてくれ。
女の子の寝顔は見ちゃいけない物なんだ。」
「でも可愛かったんだからいいじゃん。」
「そういう問題じゃない！！」
その後はずっと神楽に痺れた足をいじめられた。

「神楽、今日はどうするの？」

俺の足も治り、朝食も宿で食べ終わって俺は神楽にたずねた。

「今日も聖森で稽古だろうな。
で、今日こそはその後、祭りに行こう。」

「今日は俺もついて行っていい？」

今日の俺は特にやる事も無く暇だった。

「別に構わないが、氷夜は聖森には入れないだろ？」

そう、それは昨日も問題になった事だ。

「あ～、それならここから直接、聖森まで道を繋げるから大丈夫だよ。」

要は誰かに見られなければ良いのだ。

「能力を使ったりしてバレたりしないか？」

「これくらいなら周りに能力行使は気付かれないから平気だよ。」

「そうか、なら私は準備をするから少し待っていてくれ。」

「あぁ、分かった。」

俺も待ち時間を有効活用することにし、宿の厨房を借り、昼食のお弁当を作ることにした。

稽古

俺達は今、”どこでもドア”をくぐって聖森にいた。

「私は湖のほとりで稽古をしているが、氷夜はどうする？」

「俺はここで横になって見てるよ。」

神楽は既に完全な巫女服に着替えており、その長髪の黒髪にあいまって、とても魅力的に感じた。

神楽は手に持った自分と同じ名を持つその”神楽鈴”を鳴らす。

「シャン」

その瞬間、時が止まった。

「うん？」

時間にして一瞬。

鈴の音が広がった後のほんの一瞬。

それでも神楽は時を止めていた。

しかし、神楽はそれに気付く様子もなく、美しく舞い始める。

「シャン」

俺は周りに極少量の”リリス”を張り巡らせ、僅かに止まるその時を燃やした。

そのことにより、俺はいちいち止まることなく、神楽の舞いを鑑賞できる。

一時間が経った。
どうやら舞いも一区切りついたようで、神楽はこちらに歩いてくる。

「どうだ？」

「可愛いと思うよ。」

「？」

「その巫女服姿。」

「そんな事を聞いてはいない！！
いや、嬉しくない訳じゃないがな。」

いちいち顔を赤くして反応する神楽はやっぱり可愛いくて、見てて飽きない。

「神楽、一つ訊いていいか？」
「構わないが。」
「神楽は時を止める霊術を使えるの？」
「……私がか？」
神楽は身に覚えがないのか、不思議そうな顔をして聞き返してきた。
「そう。
神楽が舞っている時にその鈴の音が響いた瞬間だけ時が止まるんだよ。」
暫く思案顔になる神楽。
「私には身に覚えがない。
だが、有り得ない話でもないか……」
「どういう事？」
「霊術と魔法は基本的には同じなんだが、根本的な発動方法が違うんだ。
霊術は詞でそれを発動させ、魔法は文字でそれを発動させる。
もし、この鈴の音が詞となり、それを私が無意識で発動させていたと考えれば一応辻褄はあう。」
「なるほどね。
試しに、霊力を込めて鳴らしてみて。」

「分かった。」

神楽の霊力が”神楽鈴”に流れて行くのを感じた。

「シャン」

刹那、今までよりもかなり強力な時を止める力が放たれる。
しかし、その多くは拡散してしまい、長くなったとはいえ、止まったのは一瞬といって差し支えない程の時間だった。

それを近距離で浴びた俺の周りの”リリス”はそのエネルギーに応じ肉眼で捉えられる程の黒炎となる。

「きゃっ！！」

普段の口調からは考えられない可愛らしい悲鳴が神楽から上がった。

「ごめんごめん、そういえば、まだ俺の能力の説明をして無かったね。
俺の能力は重力と闇を操る事。
闇っていっても重力によって生み出した未知物質（ダーク・マター）の事なんだけどね。
で、今のはその未知物質（ダーク・マター）の応用で生み出した黒炎、”リリス”って言うんだ。

それにしても神楽、凄いよ。
時を操るなんて俺の世界にはそんな奴、いなかった。」

時を”創り出す”っていう荒技なら白夜がやってたけど。

「この世界でもそんな霊術は聞いた事がないな。」
先程のかわいらしい悲鳴をまだ気にしてるのか、神楽の顔は少し赤かい。
「どうする？
その力、鍛えてみる？」
「そうだな。せっかく使えると分かったんだから使いこなしてみたいな。」
俺はこの力に俺達、能力者の”神格化”つまり概念にまで及ぶ力に似た物を感じていた。
「じゃあ、俺も手伝うよ。
それにここなら俺が能力を使っても誰にもバレないしね。」
「そうだな、よろしく頼む。」
万が一、神楽の力が暴走した時の為に俺は神楽の特訓の相手を勤めることにする。
「だが、今日は祭りもこの後控えてるんだし、舞いの稽古だけにしておいて、特訓は明日からでもいいか？」
「そうだね。
じゃあ、そろそろお昼だしお弁当にしようか。」
俺は持ってきたお弁当を広げた。

「……氷夜、よくあの短時間でここまでメルヘンチックな物ができたな。」

今日のお弁当は、ニンジンをウサギの彫刻のように削った物や、ブロッコリーの上に鳥の形に切ったカマボコをのせた物。
後は無難に唐揚げとタコさんウインナー。

「頑張れば何とかなるものだよ。」

「なぁ氷夜、箸が一つしかないんだが？」

「おかしいな～、忘れてきちゃったかな？
でも、一つでも大丈夫だよ。
ほら、あーん。」

俺はタコさんウインナーを箸で掴み神楽の口に運ぶ。

因みに、箸が一つしかないのは勿論わざとだ。

「待て、私は別に手掴みでも大丈夫だ！」

俺は神楽の言葉を無視し、タコさんウインナーを更に近付ける。

「うっ。」

神楽はのけぞり、それ以上後ろには下がれない。

「はい、あーん。」

俺のタコさんウインナーが神楽の唇に触れた。
神楽は観念したようでそれを口にした。

「うん、美味いな。」

そこから先は神楽は従順なもので、俺が差し出したものを余すことなく、食べてくれる。
正直、雛鳥にご飯を与えているようで可愛かった。
気がつくと俺が用意したお弁当は空になっていた。

「……すまん、氷夜の分が無くなってしまった……」

「別に構わないさ。
元々神楽の為に作ったものだしね。
それに俺は小食だから全然腹は減ってないよ。」

俺は空気中から養分を取り入れる事が可能なので、極論、何も食べなくても生きてゆける。

「それなら良いのだが…」

「その代わり、お祭りでは奢ってくれよ。」

いつかの暗殺者から頂いたお金は既に底をついていた。

「父上に氷夜に給料を払うよう言っておこう。」

「俺は神楽がいればそれで良いよ。」

「金銭的な意味で言われても嬉しくないな。」

神楽は苦笑い。

「この世界に神楽さえいてくれれば、それで俺は満足だよ。」

俺は神楽に顔を近付け、頭を撫でながら、割と真剣に言った。

「ちょ、調子にのるな！！」

神楽は顔を瞬時に真っ赤に染め、目にも留まらぬバックステップで俺から離れる。

いや～、神楽の反応は楽しいなぁ。

「もう稽古に戻る！！」

神楽は怒った口調で戻っていってしまった。

が、俺は神楽の顔から笑みが漏れているのを見逃さない。

その後、稽古は夕暮れまで続いた。

お祭り

†††††††††††††††

私達は氷夜が作った扉のようなものを通り、借り屋に戻ってきていた。

「神楽は浴衣とか着ないの？」

一応、浴衣一式を持ってはいるが、アレは動き難いので私はめったに着ない。

「……着て欲しいのか？」

「うん。」

こういう時の氷夜の笑顔に私は弱い。
おそらく氷夜もそれを知っていてやっているのだろうからたちが悪い。

「はぁ、仕方ないなぁ。」

結局いつも氷夜のお願いを了承してしまう。

「着替えるから、外で待ってろ。
覗いたら、ここから追い出すからな。」

「それは困るね。」

氷夜が外に出て行ったのを確認し、私はしまってあった浴衣を取り出して着替えた。

料理はできないが、こういう着付けは姫の嗜みとして習わされていたので、問題なく一人で着替えられた。

「氷夜、入ってもいいぞ。」

入ってきた氷夜は私を見たとたんに固まった。

今までの経験から、氷夜は私を見た瞬間、ベタ褒すると思っていたので、少し心配になる。

「どこか変か？」

「……いや、綺麗だよ。」

氷夜は私のもとに歩み寄って、私の手を取り顔を私の顔に近付けてきた。

「だから襲っていい？」

なんで私は氷夜に襲われそうになってるんだ！？

からかわれてると分かってはいる。

分かっていても目の前にある氷夜の整った顔に見つめられて顔が赤くなることを防ぐことはできなかった。

「いいわけあるか！！」

「じゃあ、今日はこれで我慢するよ。」
氷夜は手に取っていた私の手をそのまま握った。
「まったく、しょうがない奴だな。」
私もその手を握り返した。

「神楽、あーん。」
氷夜は私の持つパックからたこ焼きを取って私に差し出してくる。
「あーん。」
この”あーん”攻撃は避ける事が不可能なのは経験済みなので、抵抗することなくそれを受け入れる。
しかし、そこで私は周りの視線に気付いた。
……もしかして私はかなり恥ずかしい姿を人前に晒しているのでは

ないか？

「なぁ、人前でこういうことをしたくはないんだが？」

「でも、これ以外に方法がないよ。」

私は右手にたこ焼きを持ち左手は氷夜と繋いでる状態でたしかにこの状態から私一人でたこ焼きを食べるのは難しい。

「手を離せばいいだろ！」

「ダ～メ、離さないよ。」

手を振り、氷夜の手を離そうとするが、どういうわけか氷夜の手は離れない。

「はい、あーん。」

はぁ、もう諦めた。

なんだか氷夜に調教されている気もしないでもないが……。

「もう、分かった。

その代わり、このたこ焼きは氷夜が持ってくれ。」

氷夜は不思議そうな顔をしながらも、私の持っていたたこ焼きを持つ。

そして私は氷夜が持っていた楊枝を受け取る。

「氷夜は昼飯も食べてないんだから、食べなきゃダメだぞ。

ほら、あーん。」

これは”あーん”する方も案外恥ずかしい。
氷夜は嬉しそうに食べてくれた。
たしかに氷夜に食べさせるという行為はなかなか楽しいものだった。

私達はその後、いろんな店を回った。
その間も氷夜とずっと手を繋いでいたので、知り合いと出会う度に勘違いされ、祝福されたり、からかわれたりした。
中には何故か泣きながら氷夜に飛びかかるという過激な祝福もあったが、そのあたりは全て私の拳で沈めておいた。
おそらく、祭りの雰囲気に悪乗りしてしまったのだろうが、それは節度を守るべきだと、身を持って教えてやった。

「氷夜、すまないお手洗いに行ってもいいか？」
どうやら少し水分をとりすぎたらしい。
「構わないよ。」

「そうか、なら手を離してくれ。」

「え……」

氷夜は迷子の子猫のような目で私を見つめてくる。
しかし、いくら氷夜に弱い私でも、これは越えられない一線だ。

「氷夜、帰ったらまた繋いでやるから。」

「それなら許す。」

子猫から一変、かなり上から目線で言われた。
私一応、姫なのだが……

なっとくはいかなかったが私はお手洗いに向かった。

†††††††††††††††

へ〜、この世界にも公衆トイレってあるんだ〜。

俺はかなり下らないことを考えつつ、また一人、俺達をというより神楽をつけ回す所謂ストーカーを排除した。
排除とはいっても”どこでもドア”で街の別の場所に移しているだ

けなのだが。

だが、これで排除したストーカーが十人。
直接攻撃してきて神楽に沈められたのが三人。
道で俺に呪うような視線を送ってきたのも含めると数え切れないほどの男が神楽に好意を寄せていることが分かる。

「やっぱり神楽は人気があるなぁ。」

「や、やめてくれ！！」

すると、近くから叫び声が聞こえた。

見ると数メートル先の店の前で柄の悪い兄ちゃん達が大人の男を殴っていた。

「しっかり諸場代払ってくれれば、こんなことはしないんだよ？」

うん、どこの時代にも悪い奴はいるもんだ。
けど、天界人にもヤクザさんはいるんだなぁ。

と、俺はそんなことを考えていた。

因みに助ける気などない。諸場代を払うのがルールならそれをすべきだろう。
できないなら、ここで店を開くべきじゃなかったし、知らなかったなら調べるべきだったのだ。
既に大人になった人は自分で起こした事の責任は自分でとるべきだろう。

俺は見てみぬふりをし、神楽を待った。
神楽なら助けるのかな？
そんなことも思いつつ。

「パパを虐めるな！！」

ほんの小さな八歳ていどの男の子がその男を庇っていた。
言葉からして息子なのだろう。

「この社会のゴミくずめ！！」

最近の子は凄い言葉を知ってるな……
その子の言葉には驚いたがその内容には同意した。

「てめぇ、子供だから殴られないとでも思ってんのか？」

柄の悪い兄ちゃんが棒のような物を振り上げる。
その子の父親である男は恐怖で腰が抜けてるのか子供を庇おうとしていない。

「死んだらゴメンな！！」
そして、その棒が子供に振り下ろされた。

「やめとこうか、社会のゴミくずさん。」
すんでのところで俺の腕は子供を庇った。
そのまま素手で棒をへし折り、兄ちゃんをそのまま殴り飛ばす。

「死んだら、ゴメンな。」
さすがにこんな人目につくところで殺す訳にはいかない。
俺は殺気を男達に当てた。
男達はビビってそのまま逃げていってくれた。

俺は人は嫌いだが、基本的に子供には優しい。
というのも、子供の頃に人生をねじ曲げられた経験のある俺は子供の人生をねじ曲げるのを良しとしなかった。
だが、これはただの偽善に過ぎない。
その証拠に俺は一度助けた子供が大人になり俺の敵となって現れれば迷わず殺すし、仕方ない場合も迷わず殺す。

「大丈夫かい？」

「あ、ありがとう。」

俺は子供の頭を撫でてから神楽のもとに戻る。

「ありがとうございました。」

その子の父親も頭を下げてくるが、俺は殺気すら込めた冷たい視線だけ返した。

子供を危険に晒し尚且つ庇うことすらできなかったその男は嫌悪に値した。

「氷夜、格好良かったぞ。」

神楽がお手洗いから出て一部始終を見ていたのは分かっていた。

「そうでもないよ。」

「照れるな、照れるな。」

俺は神楽の手を再びとり今度は指を絡ます。

「じゃあ、これはご褒美ということで。」

「ま、待てこれはさす…」

俺は神楽が何か言い終わる前に歩き出した。

来客

††††††††††††

世界が本当に俺達三人だけたった頃。
それはまだ白夜もマゼリナと俺以外には心を開いていなかった頃だ。
既に俺達は戦闘に投入されていたし、”神羅”の最強戦力として扱われていた。
何度か危険過ぎる戦力として処分する案はでたらしいがそもそも、俺達を処分できる奴がいないのでその案は却下された。
あの日から俺達に注がれるのは愛ではなく恐怖の視線。
俺達の心はひどく歪んだが、壊れはしなかった。
一人では耐えられなかったかもしれないが、三人だから耐えられた。
俺達はいつも三人で遊んでいた。

「「チェックメイト！！」」

白夜とマゼリナはチェスが好きだった。

「なんでおまえ達はそんなに息が合うんだ？」

俺は白夜にもマゼリナにも個人で戦えば負けない。
しかし、白夜とマゼリナが二人掛かりで俺と戦うと何故かいい勝負になる。
どう考えても二人で協力できるようなものでは無いと思うが、二人はお互いの弱点をカバーするかのように良い手を打ってきた。

「今日から俺の事はキングと呼んでくれ。」

「じゃあ、私はクイーンだね。」

白夜とマゼリナは得意げに言う。

「まだ俺の方が一勝多いだろうが！！」

「よしマゼリナ、後二回勝つぞ！！」

「お～！！」

結局、俺達の勝負は引き分けで終わった。

†††††††††††††††††††

俺達は祭りをたっぷり堪能したので、家に戻ってくる頃には日をまたいでいた。
もちろん、あの後も神楽と俺は指を絡まして手を繋いだままだった。
余談だが、俺に襲いかかり神楽に沈められる奴の数は倍増した。

明日、まぁ正確に言えば今日は稽古も霊術の修行もあるので、神楽も俺もそれぞれの部屋に戻り眠ることとなった。

俺の部屋に入るとそこには蒼い髪の美少女がいた。

「はじめまして、氷夜。」

俺が気づけなかったのは検索（サーチ）ではそこに存在を確認できなかったからだ。
どうやら、そいつは物質量のない何かのようで、本体は別にあるらしい。

俺はその女を無視して布団に潜る。

「ちょっと何で無視するのよ！？」
その女は俺に叫ぶが質量がないため触れることはできない。
「なに？
うるさいんだけど。」
「いやいや、もっと反応してくれてもいいじゃない。」
「おやすみ。」
俺は実害がないから放っておく。
「あ～、もう！！
要件を話すからちゃんと私の話を聞いて！！」
「……仕方ないな。」
これ以上うるさいと神楽も起きてしまうので、渋々起き上がった。
「で？」
「魔王になって頂戴。」
「やだ。」
話は終わった。
さぁー寝よう。
「氷夜が嫌って言ってもダメだよ。

私が決めたんだから」

まったくもって面倒臭い奴に捕まってしまった。

「一応聞いてやるよ、何で俺が魔王に決められてるんだ？」

魔王というのはたしか魔界を治めている内の一人だったはず。

「氷夜の攻撃が美味しいから。」

意味が分からない。

「そういえば何で俺の名前を知ってる？」

「私は何でも知っているわよ。」

「あっそ。」

「少しは驚いてよ～！！」

もうどうでも良くなった。

「そもそも魔王って何だ？」

「魔界を統べる王のこと。」

「おかしくないか？

魔界を統べるのは六大魔将で、魔王はその内の一人だろ？」

少なくとも俺は神楽からそうきいた。
「表向きはそうよ。
けど魔王の保持する戦力が圧倒的だから、事実上の王と言って差し支えないわ。」
「一体どれくらいの戦力を保持してるんだよ？」
「七人」
俺は無言で布団の中に戻る。
「待って待って、確かに七人だけれども、七人とも覇族なのよ！」
俺は顔だけそいつに向けた。
「覇族ってなんだよ？」
「魔将や神と同じくらいの力を持った魔物のことよ。
力を持ちすぎた魔物は他の魔人達と同じように思考できるようになるの。
そして魔人と同じように思考できるからそれは魔人として扱われるようになったのよ。」
「確かに一人で神七人並みの戦力を保持しているなら納得だな。
だけど、よくそんな力を持った奴らが魔王に従うな。」
「魔王の条件は私達一人一人に勝つことだから。

私達は私達より弱い者には従わないもの。」
”私達”ということはこいつも覇族なのだろう。
つまり見た目は美少女だが実はめちゃくちゃ強い訳だ。
「じゃあ、覇族内で王を決めろよ。」
「ダメダメ、私達は同じ覇族に指図されたくないの。
だから、覇族以外の誰かを王におくのよ。」
「俺、人間だけど？」
「問題ないわ。」
おっと、待て待てこれは、まるで俺が魔王になるような流れじゃないか。
「とりあえず、俺は魔王にはならないから。」
「別に王ってのはあなたがなるかどうかを決める物じゃないわ。
周りがその人を王と認めればそれは紛れもない王なのよ。」
…なぜか説得されそうになってしまった。
とりあえずは無視することにする。
「まぁ、いずれ氷夜は私と戦うことになるから。
そういえば、名前を教えてなかったわね。
私の名前は葵。
じゃあ、またね～。」

勝手に言葉だけ残して葵というらしい奴は消えていった。

「ったく、面倒臭いな…」

それでも俺が葵の言葉に最後まで耳を傾けていた。
それは葵の目がまるであの日の俺のように曇っていたからだ。
愛を知らない目をしていたあの日の俺と同じ。

「葵……か。」

一応名前は覚えておいてやるよ。

俺が名前を覚えておくことはかなり珍しい。
それほど、俺にとってその目は印象的だった。

鍛錬

†††††††††††††

朝早くからはじめて今日の分の稽古を昼までに終え、私は氷夜と共に私の新しい霊術について話あっていた。

「神楽、とりあえずは時を長く止められるようにならなくちゃね。まずはその特訓からかな。」

「そうだな。」

私は霊力を込めて鈴をならす。

すると氷夜の周りにこの間のような黒炎が現れた。

「う〜ん、実戦で使うにはまだまだ、かな…

もしかしたら、物を媒介にしたやり方が霊力を霧散させているのかも。

霊術で鈴の音は出せない？」

「やってみよう。」

私は霊力を集め、神楽鈴の音をイメージしそれを発した。

「シャン」

氷夜の黒炎が今までとは比べものにならない程燃え上がった。

「驚いた、今ので一秒の半分くらい時が止まったよ。」
「次は霊力を乗せてやってみよう。」
「今のは霊力を乗せてなかったの！？」
氷夜の言葉を無視して霊力を乗せて鈴の音をイメージする。
「シャン」
すると今度は更に黒炎は大きくなった。
「……凄いね、一秒も時を止めたよ。
これなら十分実戦でも使える。」
「だが、氷夜には効かないではないか。」
「それは俺の”リリス”の概念の方が神楽の時を操る概念よりも強いからだね。
でも、俺以外なら充分効くと思う。
ただ、強い相手だと効いても抵抗されて数瞬しか時を止められないかもしれないから、今よりももっと長い間止められるようにならないと強敵相手に使うのは難しいかな。」
「なるほどな。」

それから私はこの術をなるべく長く続かせるように自分なりにいろいろ試してみた。

「待って神楽。
今のどうやったの？」

それは私が特訓をはじめてから四時間がたった頃だ。

氷夜はびっくりしたように私に尋ねてきた。

「今のは鈴の音を響かし続けるんうなイメージでやってみたんだが、どうかしたのか？」

「気付いてないのかい？
今、神楽は時を止めずに遅くさせていたんだよ。
ちょっと、ひたすら響かせるようなイメージで鳴らしてみてくれない？」

「分かった。」

私は永遠に続く響きをイメージした。
すると、さっきまで気がつかなかったが、確かに時が延びるような感覚に襲われた。
どうやら、時を止めるよりも時を遅くさせる方が燃費がいいらしく、私の体感でそれは十秒ほど続いた。

「なるほど、今のでだいたい時間を十分の一くらいに縮小してるね。つまり、神楽は相手よりも十倍早く動けるんだよ。
たぶん、練習すればもっと早く動けるようななると思う。
でも時を止める訳じゃないから、これは実戦も兼ねて練習した方がいいかな。」

たしかに、相手よりも十倍早く動けるといってもたかが十倍だ。
相手の行動を止めるのとは違い、戦闘の最中に使うとなると、それだけで術の発動も難しくなるだろう。
そう考えると、やはりこれは実戦練習をした方がいい。

「そうだな、早速たのめるか？」

「ちょっと待って、その前にこの術の名前を決めようよ。」

「ああ、名前があった方が呼びやすいし、便利だ。
時を操るのだから”時霊術”で良いとは思うが、それぞれを何と呼べばいいだろうか？」

結局名前を決めるのに私達は二時間を費やした。

「じゃあ、時を止める方が時霊術【静】
遅くするのが時霊術【瞬】で決まりだな。」

私達は長い塾考の末に無難な名前をつけた。
その時にはもう、あたりは暗くなってしまった。

「今日はもう遅いし、慣れないことばかりで神楽も疲れてるだろいから、この辺りで切り上げよう。」

実際、私は氷夜のいう通り、クタクタだった。
特に最後の名前つけは精神的にかなり疲労した。

「そうだな。」

帰りは氷夜がここと家を直接つないでくれるので、そこはとても楽だ。

私は家に着くと同時に布団に倒れこんでしまった。

「神楽、今日はお疲れ様。」

目を開けるとそこには氷夜の顔があった。

「不甲斐ない。
疲れて寝てしまったようだ。」

「しようがないないさ。
時を操るなんてとんでもないない事をやってのけたんだから。
それに今日一日でだいぶ成長したしね。
むしろ俺は神楽はよくやったと思うよ。
ほら、ご飯作ってきたから。」

どうやら夕飯を作らせてしまったらしい。
これじゃあ、まるで氷夜が奥さんのようだ。
いや別に結婚してる訳じゃないから奥さんというのもおかしいかもしれないが、だけど、そういうのも……。
疲れた頭で更に混乱し、私は無意味にテンパってしまった。

「顔が赤いね、やっぱり疲れてるんだよ。
ほら、俺が食べさせて上げる。」
そういって氷夜は作ってくれた肉じゃがを私に食べさせてくれる。
例によって私は抵抗しなかった。

「おいしい？」

「あぁ、うまい。」

氷夜の作ってくれるものは相変わらずとてもおいしい。

「どれどれ……うん、上手くできたみたいだ。」

氷夜自身も満足できる味だったようだ。
しかし私は重大なことに気付いた。

氷夜、さっきまで私に食べさせていた箸を使って今食べたか！？
それが、思わずなのか、わざとなのか分からないが……
これって間接キス！？

「はい神楽、あーん。」
氷夜は更にその箸で再び私に肉じゃがを食べさせようとする。
ま、待てこれは私も間接キスってことだよな！？
それは、恥ずかしいんだが……
しかし氷夜は気がついてないようだし…
むしろここで意識するような態度をとる方がよっぽど変か？
私は気にしないようにして氷夜からの肉じゃがを食べた。
すると氷夜は私の耳元に口を寄せていき……
「間接キスしちゃったね。」
囁いた。

「なんで氷夜はそういう恥ずかしいことを言うんだ！？
しかも耳元で！！」
「でも嫌じゃないんでしょ？」
……意地悪だ！！
意地悪氷夜が光臨している！！
こうなると私には勝ち目がない。
「嫌……じゃない。」

「素直な神楽はかわいいな。」

「知らん！！」

私は早々にこの甘々空間を終わらせる為に布団に潜る。
氷夜は何も言わず布団の上から私の頭を撫でてくれた。
私は気持ちがいいのと溜まった疲れによりすぐに眠りに落ちた。

†††††††††††††

神楽と鍛錬を始めて一週間が経った。
あれから何度か暗殺者に狙われたが、神楽に気付かれないよう秘密裏に処分している。

この一週間で神楽は目まぐるしい成長を見せた。
今ではまるで初めから使えたかのような適応力だ。
もちろん、神楽の努力によるところもある。

毎日倒れるまでやっているのだから。

まぁ、そのおかげで俺は弱った神楽を愛でることができているんだけど。

しかし、神楽の成長の速さは神楽の努力だけではどうにも説明がつかない。

最初に有耶無耶になって忘れていたが、神楽の名前は”月詠”　神楽　だ。

俺は神楽の成長の早さは神楽が神、もしくはそれに準ずる何かであるからではないかと推測している。

そんな事はどうでもいいんだけどね。

神楽が神だからって俺が神楽への態度を変えるわけじゃないし。

そう、それが問題なわけではない。

では何が問題かというと、単純に神楽が強くなりすぎているのだ。

すでに一瞬だけなら俺の概念重力操作をも使った最高スピードに追いつける程になっている。

神楽はまだ、それをしてしまえば霊力が尽きてしまうので、実戦では使えないがこの成長速度なら近いうちに実戦で使えるようになるだろう。

そうなると、俺が手加減できなくなってしまい、神楽を怪我させてしまうかもしれない。

それが俺は心配だった。

それは神楽と鍛錬して一週間後の朝食の時だった。

「氷夜は強すぎだ！！」

これまで、実戦を兼ねた試合は多くしてきた。
が、今までの模擬戦は全て俺の勝利で終わっている。
いくら神楽の成長が凄まじいといっても、俺が負けるわけがない。

「護衛が神楽よりも弱かったら意味ないだろ？」

「確かにそれはそうだが…
だが、やはり負けっぱなしはつまらん。」

「じゃあ、俺に一撃でも当てられたら御褒美をあげよう。」

「良い案だが、その御褒美とはなんだ？」

……しまった、俺ってお金ないし、御褒美が思いつかない……

「えっと…、神楽の願いを一つだけかなえてあげよう。」

「なんでもいいのか！？」

「俺にできることなら。」

「よし、早速聖森で勝負だ。」

「ちなみに、できなかった場合は罰ゲームがあるから。」

俺は満面の笑み。

「……」

顔をしかめる神楽。

「……分かった。」

苦悩の末、神楽は了承した。

どうやら、よっぽど俺にかなえて欲しい願い事があるようだ。

場所は変わって聖森。

「始めるけど、準備はいい？」

神楽は自分の刀を構え、俺も神楽が用意してくれた剣を構える。

「いつでも大丈夫だ。」

二人の間に緊張が走る。

木の葉が一枚、湖に波紋を広げた。

その瞬間、俺も神楽も動いた。

神楽の鈴の音が広がり時霊術【瞬】が発動し、時間が遅くなるのを

感じる。
その遅くなった時間に捕らわれず動くことのできる神楽は俺に刀を振り下ろす。
だが、重しを外した俺はその遅くなった時間内でも充分神楽に対応できる。
神楽の刀を俺の剣が上に弾いた。
すぐさま、しゃがんだ神楽。
ほぼ同時にその頭上を俺の蹴りが通り過ぎた。
低姿勢になった神楽はそのまま足の脚力も上乗せした突きを放つ。
俺は剣の柄の部分を刀の側面にぶつけ、その軌道をそらす。
俺の顔のすぐ横を通り抜ける神楽の刀を無視し、そのまま、手首を返し神楽を斬りつける。
神楽は俺が剣の柄をぶつけた瞬間に左手を放しており、刀の鞘を腰から引き抜きそれで俺の攻撃を受け流す。
それによって俺の剣は上の方に流され、未だに俺の顔の横にあった刀が再び俺に迫る。
俺はそれを今度は手刀で弾く。

「シャン」

その瞬間、神楽の時霊術【静】が発動。
俺は時が止まるよりも先に”リリス”を呼び出した。
しかし、その一瞬の間に神楽は刀を鞘にしまい、居合いの構えをとった。

神楽は今まで時霊術【静】を使用する時は必ず静止していた。
というのも時霊術【静】は時霊術【瞬】に比べて集中しないと発動しないらしいからだ。

この一戦で更に成長したのかよ……

刹那、神楽の刀が一閃。
しかも、それが放たれる瞬間、時霊術【瞬】の効力が更に増大。
それにより神楽はもう一つ上の”早さ”に到達した。
どんどん遅くなっていく時間のなか、俺は概念重力操作により自分の速度を相対的に上げる。
これにより、再び神楽と同じ”速さ”になった俺はすでに直前まで迫りくる刀をギリギリ間に合った指先で止めた。
神楽は早くなっただけであり、力が強くなった訳ではない。
だから、神楽の刀を俺は指先だけで止められた。

「勝負あったな。」

「はぁはぁ。」

神楽は倒れて息を荒くしていた。
それでも、最初は意識を失っていたのだから、大したものである。

「そうだ、最後のいきなり早くなった奴は時霊術【刹那】と名付けよう。」

勝手に命名。

「やけに張り切ってたけど、神楽は俺に何をお願いしたかったの？」

「……世界を見てみたかった。
魔界、人間界、天界の全てを見渡せるところに行きたかったんだ。」

そんなこと、頼めばすぐにつれてってあげたのに。

神楽は俺に頼みごとをすることは殆どない。
それがちょっぴり俺には寂しかったりする。

しばらくして、神楽は回復し、息も整ってきた。

「やっぱり氷夜は強いな。」

「当たり前だろ。」

しかし、実際さっきの最後の攻撃は危なかった。
そろそろ本気で戦わないと足元をすくわれるかもしれない。

「では、お楽しみの罰ゲームの時間だ。」

「げっ、覚えていたのか…」

「もちろん！！」

俺は神楽に近づき、神楽を抱いた。

激しい戦闘の後だけあって神楽の巫女服や髪は汗でしっとり濡れていた。

ちなみに俺は汗はかかない。

「氷夜、せめて水浴びをした後にしてくれないか？」

神楽は顔を真っ赤にして上目遣いで俺に懇願した。

「そんなかわいい顔してもダメだよ～。

それに、それじゃあ罰ゲームにならないしね。」

俺は神楽の首筋に顔をうずめ、神楽に聞こえるように思いっきり息をすった。

ちなみに、俺は匂いフェチではない。

ただ、神楽の匂いが好きなだけ。

「やめろ、汗臭いだろ？」

「いや、神楽のいい匂いがするよ。」

「この変態。」

神楽は顔を更に赤くしてそう呟いた。
どうやら、先ほどの戦闘で疲れきってしまっているようで、抵抗はなかった。

「ぺろ」

俺は神楽の首筋を舐める。
汗をかいたその場所はしょっぱかった。

「や、やめろ！！」

これには流石の神楽も抵抗してきた。

「罰ゲームなんだから、大人しくしてて。」

俺はそれを無視し神楽の首筋から鎖骨にかけて舌を這わせる。

「あっ」

神楽は時折、甘い声を出す。
すると俺は調子にのって更にペロペロした。

しばらくその罰ゲームは続いた。

「はぁはぁ、氷夜に汚されてしまった……」

「失礼だな、俺の唾液は綺麗だよ。」

罰ゲームにより神楽の声は絶え絶えになっていた。

俺は疲弊した神楽を有無をいわさずお姫様抱っこをして”どこでもドア”をくぐり家まで帰った。

風呂にも入れようとしたが、それは神楽の猛抵抗にあい、諦めた。

神楽はそのまま風呂に一人で入っていった。

「さてと、俺はお姫様の願いを叶えに行きますか。」

VSゼウス

††††††††††††

私は今、お風呂で赤面していた。

なんで甘い香りがするんだよ！？

それは氷夜に罰ゲームで舐められたところから発せられていた。

くぅ～、いくら私の体力が切れていたからって好き放題し過ぎだろ。

拒絶しなかった私も悪いのではあるが……。

「ぺろ」

……待て今、私は何をした？

「はぁ、氷夜のせいで私も変態になってしまった。」

どうやら私は無意識の内に匂いを嗅ぐだけでなく、氷夜が舌を這わせたそこを、舐めたらしい。

私はもう、いろいろな意味でのぼせそうなので早々に風呂を切り上げた。

悶々とした夜を終えた翌朝。
私達は久しぶりに定食屋で朝食をとっていた。

「失礼だが、君が氷夜か？」
「そうだけど。」

唐突に氷夜に話し掛けた男を見て私は絶句した。

「ゼウス殿！？」

私も数える程しか会ったことはないがその人は紛れもなく四天神の

一人、ゼウス殿であった。

「神楽ちゃんがどうしてここにいるんだ？」

「私のことを覚えてくれていたのですか。」

「あぁ、美人だからな。」

……そうこの人は愛想もいいし悪い人じゃないんだが、少々女癖が悪いという欠点がある。

「神楽、ゼウスって……」

氷夜は私に小声で尋ねてきた。

「多分、氷夜が予想している通りだと思う。」

「なぁ、あんた偉いんだろ？
こんな所で油売ってていいのかよ？」

神相手でも遜らない氷夜は流石というか、無謀というか……

「威勢のいいガキだな。
俺は嫌いじゃないぜ、そういうの。」

「そりゃどうも。」

……いつになく不機嫌？

「心配するな、今はプライベートの時間だ。
でだ氷夜、俺と勝負しようじゃないか。」

「……いいよ。」

おかしい。
氷夜は普段、この手の誘いは必ず断っている。
相手がゼウス殿だから断れなかったのだろうか？
いや、氷夜に限ってそんなことはないだろう。
ではなぜ？

私は氷夜が不機嫌なことといい、少し不安になった。

「では一時間後、場所はこの先の広場でいいか？」

「構わない。」

それだけ言ってゼウス殿は店を出て行った。

「という訳で神楽、悪いけど今日の鍛錬は中止だね。」

「それは構わないが氷夜、勝てるのか？」

「勝つよ。」

氷夜の態度はいつもと同じように見えた。
しかし私には分かる氷夜は未だに不機嫌だ。

「なぁ、氷夜どうしてそんなに不機嫌なんだ？」

「……どうしてだと思う？」

……実を言うと心当たりが無いわけではなかった。
しかしそれは私の自惚れかもしれない。

「もしかしたらだが、私がゼウス殿と知り合いだからか？」

「さぁ、どうかな。」

こうやって氷夜は肝心なところではぐらかす。
だから私は氷夜の気持ちが正確に分からないでいた。

朝食も食べ終え、約束の一時間が経ち、私達は広場にいた。

「時間丁度だな。」

「……」

氷夜はゼウス殿の言葉を完全に無視し、ゼウス殿に向き合う。
私は二人の邪魔にならないように少し離れた所で見ていることにした。

二人の間に言葉は無く、ただ沈黙がその場を支配していた。
不意に風がふく。
それが合図だったかのように二人の間合いは極限となった。
氷夜も今回は初めから本気のようで、周りには二人の剣が打ち合う音だけが響く。
私はここ数日の鍛錬のおかげで、二人の動きを捉えられるようになっていた。
しかし、捉えられるが故に分かってしまう事がある。

どうやら、氷夜はまだまだ私には手加減していたんだな。

氷夜の動きは私と鍛錬している時とはまるで違い、もしも私が今の氷夜と戦えば数秒も保たずに敗北するだろう。
それは私にとって悔しくもあり、嬉しくもあった。

二人の剣技は対照的だ。
ゼウス殿は完璧な剣技。
氷夜は、体術も織り交ぜた型破りな剣技。
だが、そんな対照的な二人が繰り広げる戦いは私には美しい舞いのよいにも見えた。

†††††††††††††††

……強い。

流石は四天神といった所か隙が全くない。
先ほどから全力でかかっているが、少しも攻撃が当たらない。

上段から迫る剣の側面を蹴りつけその軌道をずらす。
そして、俺独自の特殊な呼吸法と、相手と自分のテンポのコントロールが可能にする一瞬の加速。
その一瞬の加速は相手の調子を崩し、反応を遅らせる。

その隙を狙い、加速した剣を脇腹めがけて走らせる。
勝負を決めるには充分な技の筈だった。
しかし、ゼウスは地面を滑るような摺り足でそれを避けてみせた。
人の事は言えないが、ゼウスの動きは最早人間技とは思えない。
まぁ、ゼウスは人じゃなくて神なんだが。
ゼウスは俺と同じく、神の力も霊術も使わず、その身一つで戦っていた。
俺は剣の他にも体術も武器にして戦っているのに対し、ゼウスは体の動きを全て剣技のサポートにまわしている。
その動きは洗礼されていて幾多もの戦場をくぐり抜けなければ到底たどり着かないだろう境地にたっしていた。

「まさか、俺にここまで食いついてくる奴がいるとはな。」
ゼウスはとても嬉しそうに呟いた。
実際、先ほどから顔は満面の笑みである。
俺は神楽につく虫は何であろうと振り払いたいんだよね。
だから、俺がここで負ける訳にはいかない。

「俺の方があんたより強いよ。」
「ハハハハ。
その負けん気、豪胆さ、気に入ったぞ！！」
ゼウスは豪快に笑い、そして顔を引き締め、目が本気に変わった。

俺は逆に体を脱力させ、無駄な力を一切無くした。
それは居合いの前の脱力に似ている。

先に仕掛けたのは俺だった。
俺は剣を居合いの要領でゼウスに繰り出す。
今までよりも速いその一撃は当然のようにゼウスに避けられ、その隙をつくように剣が放たれた。
次の瞬間、剣は殴られ、その軌道を変えた。
ゼウスは一瞬驚いたような顔をしたが、それで隙を見せるようなことはなく、俺の力を利用して素早く、間合いを取る。
しかし、その間合いを俺は許さず、一瞬にして間合いを詰め、ゼウスに剣を振るう。
ゼウスにしたら、俺がいきなり現れたように見えているだろう。
これは、ただ居合いと同じように、脱力したあとに瞬発的な力を出すことを繰り返しているに過ぎない。
しかし、俺の場合は完全な脱力を刹那的に行え、なおかつ、一瞬の加速も織り交ぜている。
ちなみに、神の力や霊術を使えばもっと速くなれるが、それは相対的に速くなるだけであり、術を使った本人からすれば周りが遅くなったような感覚である。
だから、”同じ土俵においての速さ”は今、俺達が行っているように肉体的速さなのだ。

俺の攻撃にゼウスは押され防戦一方になる。
しかし、それも一瞬のことで、徐々にゼウスも俺が脱力する刹那を狙って反撃をしてきた。
まだ、一撃も当ててないしくらってもいない。
そんな均衡状態だが、それはとても脆く、簡単に崩れるものだった。
俺は脱力中に一撃でもくらえば終わりだし、ゼウスも俺の攻撃を一

撃でも防げなければ終わりだ。
だが、儚く脆い均衡は一秒以上も続いた。
そしてその均衡を崩すべく俺はある伏線を張っていた。
今までの攻撃に、複雑なリズムをつけることで、ゼウス自信にも気づかせることなく、動きをパターン化させていたのだ。
俺はいつもなら脱力を開始する場面で脱力せずに無理やり瞬発的な力を更に引き出した。
体中が悲鳴を上げる中、ゼウスのパターン化した剣を避け、繰り出した俺の渾身の一撃はゼウスの首に届いた。

「……引き分けか。」

俺の剣は確かにゼウスの首に届いていた。
しかし、それとほぼ同時にゼウスの手刀が俺の首にも届いていたのだ。
ゼウスが今まで一度も使わなかった体術で最後の最後でやられた。
ゼウスは剣技しか使わないと、思い込まされていたようだ。
伏線を張ってたのはお互い様って訳か。

「いや、俺の負けだ。」

ゼウスは満足そうな顔でそう言いった。

「なんでだよ？」

あのスピードで繰り出された手刀だ。
俺の首も確実に落ちていただろう。

「だって剣の方が格好いいだろ？」

なんでゼウスが剣技にこだわっていたのか分かった気がする。

「氷夜は、本当に強いんだな。
いやぁ～大満足だ。
またいつか、やり合おう。」

ゼウスはそう言って帰って行った。

††††††††††††

神楽を慕い、求婚までした文官長の一人、充（みつる）は、氷夜に五度も暗殺者を仕向けるほど、神楽の隣にいる氷夜を憎んでいた。

天界では例外はあるが、基本的には一夫多妻制である。
ただし、男性が自分より位の高い女性と婚姻する場合はそれは適用されないことが多い。
そして、神楽はこの国の姫である。
充は、既に妻を七人も持っていたが、神楽に婚姻を求める為に全員と離婚した。
権力もあり、容姿も良かった充は自分が断られるとは思っていなかったのだ。

自分を拒否した神楽の横にいきなり現れ、しかも神楽に笑顔を向けられる氷夜を充は許せなかった。

そんな充がその日に何故か街に散歩に行きたくなり、そして目撃した。

四天神のゼウス様に刃を向ける氷夜の姿を。

†††††††††††††††

氷夜と刃を交えた二日後、帰国したゼウスに円から謝罪の使者が現れた。

「この度は、我が国の人間がゼウス様な刃を向けたことについての謝罪を申し上げに来ました。」

謁見の間にてその報告を聞いた、ゼウスとその場にいたオリンポスの六柱の神々は大いに戸惑った。

というのも、ゼウスは前日に、円の国に自分と対等の剣技を持つ氷夜という青年と出会ったことは他の神々にも話していたのだ。

「おい、ゼウス。

まさか結界を張らずに勝負をしたのか？」

四天神であるゼウスに無遠慮に小声で話し掛けたのは、ゼウスの兄

で、この場においてゼウスの次に発言力のある海神ポセイドン。
「まさか、しっかりと厳重な結界を用意したさ。
それこそ円の国軍でも敗れないほどの奴を。」
ポセイドンとゼウスの話が終わる間を狙って報告は続いた。
「つきましては、その者にトウテツ討伐の刑を執行いたしました。」
辺りがどよめく。
”トウテツ討伐の刑”とはその名の通り、トウテツを一人で討伐に行かせるという刑である。
しかし、神々でも殺せない覇族であるトウテツを一人で討伐など不可能であり、事実上、死刑である。
神々がどよめく中、ゼウスだけが頭を抱えていた。
「使者殿。
賠償などは円に何も求めないから、もう帰っていい。」
円からの使者はもう一度頭を下げてから、謁見の間を後にした。
「おいゼウス、お前の道楽で人が一人死んだぞ？」
ポセイドンは責めるような視線をゼウスに浴びせる。
「違う。葵の奴に謀られたんだ！！
兄さんにも黙ってたけど、氷夜の情報をくれてしかも戦うように仕向けたのは葵なんだよ。」
「あの”食欲”か。

じゃあ、その氷夜って奴は…」

「たぶん、葵にマークされてたんだと思う。だけど、円と戦争を起こす訳にはいかない。残念だけど、氷夜を助けることは無理だ。」

†††††††††††††††

ゼウスとの戦いが終わった次の日、私と氷夜は宮殿に呼ばれた。

「また何で俺らは呼ばれたんだ？」

宮殿の神楽の自室で待たされている私たちは今日、なぜ呼び出されたか聞かされていなかった。

「さぁ。でも私も一応姫だから、国事関連じゃないか？」

実際、私はその容姿から国のイメージアップの為に国事には大体参

加させられる。
勿論、父上は私に強要している訳ではない。
しかし、私も普段、自由に行動している手前、断れないのだ。

「あ～！
そういえば姫だったんだよね、神楽は。」

「それはどういう意味かな？」

少し、怒気を含む私の言葉に氷夜は慌てた。

「いや～、姫様と鍛錬したり、食事したり、お喋りしたりしてたんだな、と思ってさ。」

「そうだぞ、光栄に思えよ。」

氷夜の言葉に気を良くした私は偉そうに胸を張る。

氷夜から見れば、その態度は普段の凛とした神楽と違い子供っぽさがあり、一瞬心を奪われる程の物であった。

「どうした氷夜、なんか反応してくれ。」

氷夜が固まってしまったので、胸を張った状態を止めるに止められない。

「悪い、見とれてた。」

その手の言葉は氷夜から聞き慣れてはいるが、それでも神楽のペースを崩すには充分な威力を持っていた。

「そういえば、姫様に舐められたり、お風呂に一緒に入ったり、一晩を同じ部屋で過ごしたりもしたよね。」

さらに調子に乗った氷夜の追撃が神楽に直撃。

神楽はあえなく撃沈した。

「そうやって、わざわざいかがわしい言い方をするな！！」

可哀想なくらい顔を赤くして氷夜に抗議する神楽。

「でも全部事実だよね。」

抗議の甲斐もなく笑顔で神楽にトドメを刺す氷夜。

「くっ……」

た、確かに全部事実だけど！！

「意地悪する氷夜などもう知らん！」

最後の最後で逆転、勝利を確信した。

まぁ、かなり大人気ない方法だがな……

しかし、もう後には引けない神楽は氷夜に背を向けて全力でふてくされる。

「神楽、そんな怒るなよ。」

「……」

氷夜の言葉を罪悪感を感じながらも神楽は無視する。
すると後ろから氷夜の移動する音が聞こえた。

「神楽、機嫌なおして。」

氷夜の声は私の耳元から発せられている。
というより、氷夜は私を後ろから抱きしめていた。

「…やだ。」

私はそれにも負けず、意地を張り続ける。

「ふ〜〜」

「！！」

氷夜は私の耳に優しく息を吹きかけてきた。

「機嫌、なおす？」

もはや、それはただの脅迫だった。
主導権を握り、勝ちを確信していたが、それは間違いで実際にはこうして氷夜に手玉にとられていた。
氷夜は今、心底意地の悪い顔をしているに違いない。
だが、これで氷夜を許してしまったら、それこそ完全なる敗北だ。
私は、勝ち目がない戦いに挑むはめになった。

「…なおさない。」

「ガブ！！」
わざわざ、口で効果音を言いながら氷夜は私の耳を甘噛みしてきた。
「まはなおはない？」
おそらく氷夜は、まだなおさない？　と聞いているのだろう。
「な、なおしてたまるか。」
段々、声に甘い調子が混ざるのを自覚はしていたが、こうなれば意地である。
「レロレロ」
「あっ！！」
氷夜の舌が私の耳を舐めまわす。
氷夜の舌が動く度に私は体を悶えさせた。
その状態がしばらく続いて突然、氷夜は私から離れた。
「時間が来ちゃったか。」
「はぁ、はぁ。」
私は氷夜の攻撃に息も絶え絶えになり、何故こんなことになったのかも忘れて倒れる。
そして数秒後、私たちがいる部屋に迎えの兵士が二人現れた。

「神楽様、お迎えに上がりました。」

「氷夜殿は私に着いてきて下さい。」

まだ顔は少し火照っているが息は整っていたので、迎えの兵士二人が、私達のしていた事に気付くようすはない。
おそらく、全て計算した上で氷夜は行動していたのだろう。
しかし、氷夜に舐め回された耳は、いまだに湿っておりなまめかしく光っていた。

神楽はそれを意識しないようにするのに精一杯で、氷夜が個別で呼ばれるという異常な事態に気がつくことができなかった。

†††††††††††††††

俺が個別に呼ばれた部屋は大きく、円のお偉いさんがあの老エルフと国王以外は全員そろっていた。

随分と腐った目をしている奴が多いな。

俺は自分の世界で醜く汚い社会の裏の仕事を多くこなしていた。
だから、欲望に溺れた人間は目を見ればだいたい分かる。
だが、最初に対面した時から比べると、かなりの人数がこの短期間で欲望に溺れたようだ。
丁度、それは精神操作の能力で集団催眠を使った状況によく似ていた。
十中八九、誰かが霊術か何かを使い、こいつらの欲望の種に水を撒いたのだろう。

「罪人、お前を呼んだのはお前の処罰を言い渡すためだ。」

口を開いたのは目が腐りきった屑だった。
格好は文官のようで、その表情は俺への優越感に浸っている。
そして、その視線は俺に向いていた。
どうやら罪人とは俺のことのようだ。

「俺、なんかしたか？」
特に心辺りが無い俺はそう返した。
「貴様、ゼウス様に刃を向けた事、しらを切るつもりか！！」
それに呼応するかのように氷夜への非難の声がいくつも上がった。
しかし、その半分は氷夜への悪口である。
神楽の横にいる氷夜への妬みが爆発した瞬間であった。
……どういうことだ？
周りの雑音は無視して俺はこの事態を奇妙に感じていた。
というのも、ゼウスと戦ったあの時はゼウスの張った結界が周りにあり、尚且つ俺の検索（サーチ）もあったのだ。誰かに見られるような事はありえない。
残る可能性としてはゼウスが告げ口したというものだが、それも腑に落ちない。
ゼウスの目はこいつらと違って澄んでいたし、こんな姑息で回りくどい手段を仮にも四天神の一人が取るようにも思えないのだ。
第一、俺にゼウスに命まで奪われるような理由がない。
となると、こいつらをけしかけ、しかも俺とゼウスに気付かれないように俺たちの事を目撃した誰かがこの状況を作っていることになる。
そこまで推測して氷夜は考える事を止めた。
情報が少ないという事もあるが何より例え円が敵になろうとも俺は構わないからだ。

「静粛に！
罪人、ゼウス様に刃を向けた罪は重い。
よって貴様には”トウテツ討伐”の刑を命ずる。」

再び、あの屑が口を開いた。
勝ち誇ったその顔は、よっぽど嬉しいのか口元が既に笑っている。

「で、俺はどうなるんだ？」

こいつらごときに屈する気は無いが、俺の刑が死刑ではなく、その”トウテツ討伐”の刑、というのが気にかかった。
おそらく、この状況を作った奴が”トウテツ討伐”を俺にさせたいのだろう。
ならば、その誰かの目的が分かるまで、それに付き合うまでだ。

「罪人は、今日の内に”還らずの洞窟”まで赴き、”トウテツ”を討伐せよ。
それが叶わぬ場合は、死刑とする。」

”還らずの洞窟”とはいかにもな名前である。
周りの奴らの黒い笑みからも、この”トウテツ討伐”の刑は死刑と同じ意味を持つのだろう。

「用意をする。」

「構わないが、今日中に戻って来なければ死刑であることは伝えておく。」

「分かった。」

俺は自室に戻った。

随分と嫌われたものだな。

暗殺者があれだけの数くるのだから、予想はしていたが、これだけ敵意を剥き出しにされると、思わず殺してしまいそうだ。

俺の世界で俺の怒りは天災に匹敵した。

だからであろう、久しぶりの実力の伴わない無責任な敵意にストレスを感じた。

しかし、だからといって皆殺しにしてしまえば、俺はこの国に居られなくなる。

それ自体は一向に構わないのだが、神楽と居られなくなるのは大いに構う。

この溜まったストレスは後で神楽に発散するとして、俺は仕方なしにトウテツ討伐に行くことにした。

神楽に話してから行こうとも思ったのだが、神楽はまだ部屋に帰っていないようなので、自分の部屋に手紙を起き、兵士から貰った地図を頼りに還らずの洞窟に向かった。

いったい誰に喧嘩を売ったのか教えてやる。

†††††††††††††

私が今回呼ばれたのは委任式があるからだった。
普通は父上がこの場にいる筈なのだが、残念ながら父上は”神”の国に行っているので、代理として姫である私が立つことになったのだ。

カリスも、急に体調を崩した文官長の代わりとして父上に付いていってしまったので頼れる人がおらず、多少不安ではあるが、式自体は簡単なものなので大丈夫だろう。

それよりも気になるのは氷夜だ。
さっきは気を回すことが出来なかったが、氷夜が単独で呼ばれることなど珍しい。
しかも謀ったかのように父上もカリスも不在。
私自身も式で手を放すことができない。
つまり、今この国に氷夜の味方ができる人がほとんど皆無なのだ。
もちろん、氷夜が危険な状況に陥るなど想像もできないが、それでも胸騒ぎを沈めることができない。
そんな不安を抱えたまま、式は進行していった。

式が終わり自室に戻れたのは日も傾いた頃だった。
胸騒ぎもあり、早く氷夜の安否を確認したくて氷夜の部屋に向かうとそこには氷夜の姿はなく、手紙が置かれていた。

『神楽、悪いんだけど野暮用で少し出掛ける。
今日中には帰るから家で美味しい御飯を作って待っててくれ。
護衛の方は安心しろ。
四六時中、俺は神楽を見守ってるから。』

……風呂やトイレまでは見てないよな？
後で必ず氷夜に言及しなければ。
それはともかく、手紙の内容はいつもの氷夜だ。
しかし、野暮用というのがどうにも気になる。
危ないことでなければ良いのだが。

「ガチャ」

氷夜の部屋にノックもせずに文官長の充が入ってきた。

「おや神楽様、こちらにいらしたのですか。
式も行い、お疲れでしょう。
どうですか、今から私と食事でも？」

もの凄いキザに今のセリフをきめ、自己に陶酔しきっているこの男は私に求婚を断られたのにも関わらず未だに見え透いたアプローチをかけてくる、正直言って私の苦手な奴だ。
確か、急に体調を崩したはずなのだが。

「すまんが、私はこれから家で氷夜を待たなければならないので、お断りさせていただく。」

氷夜は明日と言っていたので、今から帰って少しでも料理の練習をしておきたかった。
いつまでも氷夜に”料理もできないお姫様”というレッテルを張られているのは我慢ならない。
いや勘違いするなよ、私は別に氷夜に好かれたくて料理の練習をする訳じゃないんだからな！！

なんだか妙なテンションで自分に言い訳をしてしまった…
なに？ツンデレ？
そんなものは知らん。

「氷夜？
あ～、あの罪人の事ですか。」

……氷夜の奴、問題でも起こしたのか？
もしや氷夜が人間だとバレたのだろうか？

「氷夜が罪人とはどういうことだ？」

「あやつは、あろうことかゼウス様に刃を向けたのです。
幸いにしてゼウス様は無傷でしたが、円としてはそのような極悪人を野放しにするわけにはいきません。
しかし、もう安心です。
既に刑は執行され、私達の平和はもはや揺るぎません。」

充はかなり芝居がかった仕草で説明した。
時折光らせる歯が若干うざかった。
いや、そんなことよりも氷夜のことだ。
充の話から察するに昨日の試合が誰かに見られたのであろう。

「刑の内容は？」

「トウテツ討伐の刑です。」

最悪だ。
まだ絞首刑の方がマシだった。
氷夜なら首を絞めたくらいじゃ死なないだろう、だがトウテツとなれば話は別だ。
トウテツは覇族だ。
四天神と同レベルの力を有する覇族に一人で立ち向かうなど、蟻がドラゴンと戦うようなものである。
それほど、人と神の力の差は歴然としているのだ。
いくら氷夜が強くても精々犬がドラゴンに挑む程度の差しかないだろう。

何が野暮用だ！！
めちゃめちゃピンチじゃないか！！

心の中で氷夜へ悪態をつくが、実際この状況はかなりまずい。
この時間だともう氷夜はトウテツとの戦闘に入っているだろう。

「私も野暮用ができたので失礼する。」

充が何か言ったような気がするがそれにも構わず全力疾走で宮殿を後にした。

あのバカ、死んだら今日の夕飯は抜きだからな！！

時霊術【瞬】もできる限り使用し、トウテツのいるとされる”還らずの洞窟”に急いだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2498u/

終焉を司る者

2011年8月16日01時02分発行